



京都府立総合資料館所蔵



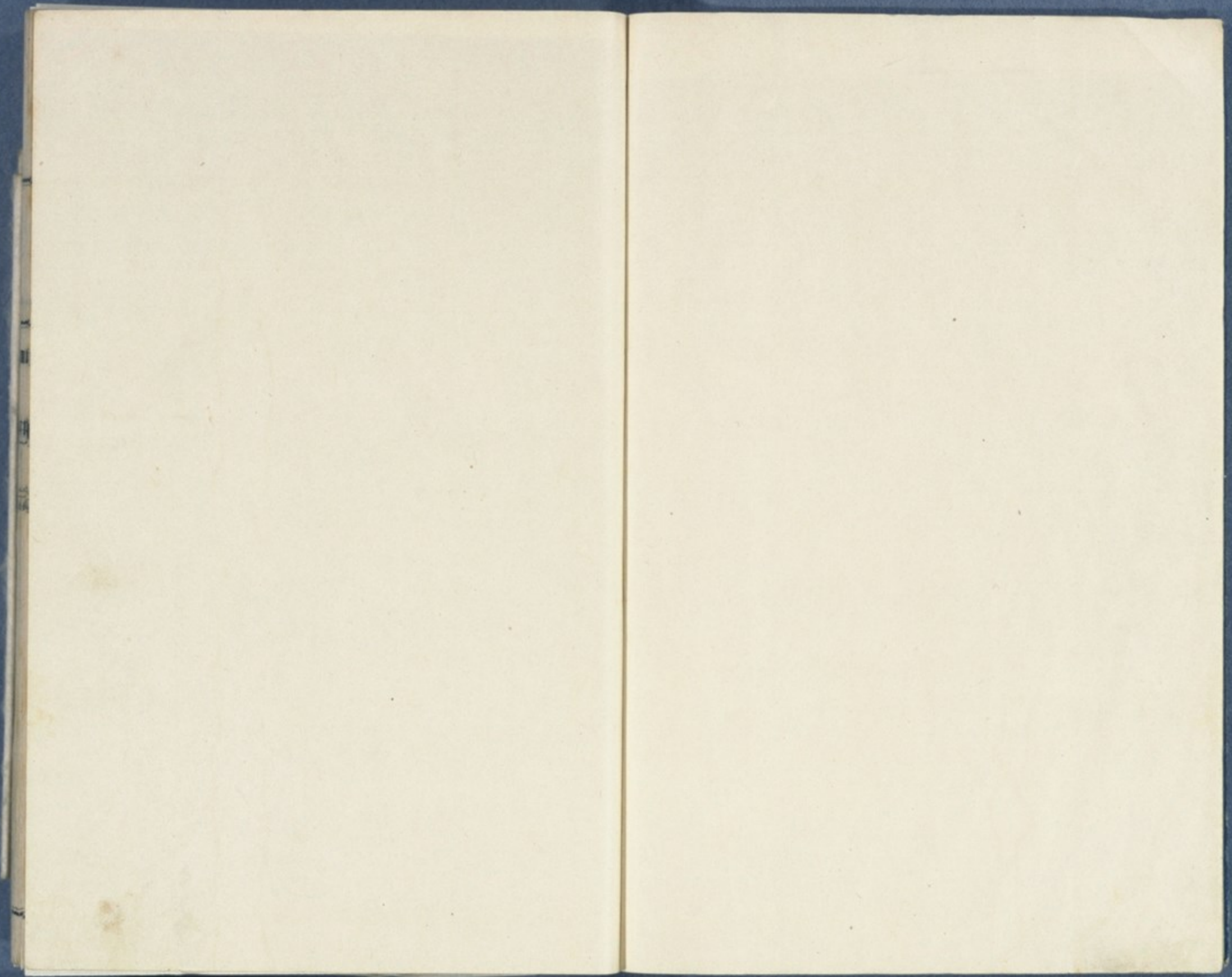
持
992
31
6

○北村先生編 丹波誌 一部拾五卷
先生に請ひて二部を淨寫し
京都帝國大學圖書館と京都
府立圖書館に各一部を寄託
す

大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

(北村先生喜壽會結末報告書を添附す)



京都府立総合資料館所蔵

丹波誌

船井郡

和名鈔ニ不奈井ト書キ延喜式ニ出テタルモ置郡ノ記載ナシ栗田郡中ニテアリシカノ説モアリ刑部志麻不奈井出鹿田原餘戸城崎野口須知鼓打木前等ノ古名稱ノ地アリ名所トシテ稱セラレタ所ハ西田村八木村鼓打村布引瀧朝倉山紅村船岡山櫻井山高岡山高屋村母祖森トス地勢ヨリ言ハバ西部ヲ以テ丹波ノ中央トスバク而シテ又京都府下ノ中央トモナレリ形勢上ヨリ言ハバ南北粟田ニ郡ガ参差タル底面ヲ爲スノ凹處コレト相交ハル其ノ西北ハ天田何鹿ノ二郡ニ界シ南方ハ波緑

京都府立総合資料館所蔵

ヲ爲シテ多記郡ニ接シ餘波ヲ引キテ東南撫津ノ
能勢ニ瀉ケノ状ヲ爲ス此ノ處一帶ヲ總稱シテ本
梅谷ト呼ブ龜岡篠山往來ノ舊道タリ東西本梅ノ
ニ村實ニコ、ニアリ原山峠ノ開鑿セラレテ以來
此ノ東街道ハ寂タリ冥タリ山陰道ノ一線南粟田
郡ヨリ來リ環状状ヲ爲ス所ヲ貫穿シテ園部ニ通
ズ此ノ一線ヤ西方諸村ニ達スベク須知ヲ過ギリ
尚西行スベシ本郡ハ丹波ノ中央ニシテ而モ丹波
ニテ、高地タリ本府中ニテノ中央ニシテ而モ本
府中ニテノ高地タリ故ヲ以テ丹波ノ水源多クハ
此ノ郡ヨリ發ス中ニ孰キ大堰知知ノ二川ニ秩マ
ル、山地ハ特ニ高位ニアリ人家ノ四面墻壁ニシ

テ東方ニ向フテ一門ヲ闢クガ如シ地勢業既ニ此
ノ如シ焉シゾ平野ヲ望マシ南粟田郡ニ接スルノ
一面ハ大堰川ニ沿ヒ八木廣瀬大藪ノ沃郊アリテ
郷邑相接シ斜地ト相錯ハル以テ一郡ノ生業ヲ蠲
集ニ得タリ之ニ垂ケモノヲ園部川沿岸一帯トス
氣候ハ園部地方ニ於テ龜岡ト大差無ク華氏驗器
ニテ三十度ヨリ昇リテ九十度以上ニ及ブ四十年
二月雪積モルヲ六寸山嶽ニ至リテハ尺餘ニ及ブ
リ而シテ龜岡ハ平地ニテ四寸山上六七寸ナリキ
産物 米麥生絲杉檜柴薪炭砒石栗葷枲串柳疊
表藟蕪煎茶鞠木黃精太布烟草木瓜獨活前胡柴
胡桔梗茯苓盡草蠟枏灰辛灰

叫岐誌

土地ノ面積ニ比較シテ人口ノ寡少ナルハ平坦ノ地ノ寡少ナルニ因スルナリシ左記ヲ見テ他郡ト参照セヨ

東西直徑最長七里 南北八里 廣袤十四方里ニ
 九 耕地六千四百二十一町四段 明治九年
 戸數 一萬七百六十 二十七年 一萬三百十二 二十九年
 一萬三百六十七 三十一年 一萬四百二十一 四十二年
 人口 五萬二千二百二十九 二十七年 五萬四十二
 百二十五 二十九年 五萬五千三百二十五 三十一年
 内男二萬七千九百六十二 女二萬七千二百七
 十三 五萬五千三百九十九 四十二年 内男二萬
 八千五百二十一 女二萬七千八百七十八

一方里 戸數 平均 七百三十 人口 平均 三千八百七
 十三 一戸 平均 五人 二十九年

高 四萬千二百五十三石四斗五升八合 正保 四萬
 一千三百十三石四升一合

政治區 白河湊皇ノ時多ク九品寺領ト爲ル戰國ノ時ハ諸家ニ分轄セラレ幕府徳川氏ノ時過半園部藩領トナリテ他管他領ト相雜ハリタルヲ明治四年豊岡尾岡園部綾部木更津ノ五縣分掌トナリ同年更ノテ京都府ノ專管トナレリ
 文久年度改高帳

高合四萬四千七百十石七斗九升一合七勺
 内

京都府立総合資料館所蔵

四千二百二十四石六斗六升七勺	御代官所
六百二十一石九斗九升四合五勺	仙洞御所
七百四十七石四斗二升四合七勺	准后御所
九千六百二十一石二斗九升二合	松平豊前守領
二萬二百三十八石六斗七升八合	小山信濃守領
四百九十四石九斗四升六合八勺	九鬼大隅守領
五百九十五石二斗二升三合四勺	水野壹岐守領
二千七百六十七石六斗四升七合五勺	柴田河内守知行
七百一十一石三斗三升九合五勺	武田河内守知行
二百二十六石	前田半右衛門知行
六百八十五石三斗五升三合五勺	川勝新藏知行
二千五百八十六石一斗八升七合	嶋 彌左衛門知行

四百一十石一斗四升四合	澁川源八知行
百十九石	河野三郎知行
三百石	森 佐仲知行
百石	梅若六郎知行
四十五石	上賀茂社領
十八石	下賀茂社領
六十五石九斗一升六合	愛宕社領
五十石	泉涌寺領
五十四石	等持院領
十三石	繼光院領
二十石	淨禪寺領
五石	高塔婆領

メ

外ニ九石五斗四升二合八勺

准后御所上納

封建政度ハ維新ノ光明ニ對シテ其ノ勢力ヲ殺カ
 レタルモ惰力ノ容易ニ消滅セラルアリ政治區ノ
 如キ依然トシテ舊態ヲ存レ其ノ最小ナルモノニ
 區長ヲ置キ以テ統治ノ端緒ヲ開キ(終論参考)數村ヲ
 收齊シテ新政ヲ布クノ機関タラシメ以テ所村制
 施行ノ基礎ヲ形造リ終ニ數十百ノ戸長ヲ改メニ
 十有餘ノ所村長ヲ置クト他郡ト大同小異ナリ舊
 村殆ンド百五十今ヤ一町二十二村ニ縮マル又ニ
 町二十一村トナル

園部町 宮町 上本町 木町 若松町

新町

園部村	小山	園部	大村	横田	黒田
摩氣村	口人	口司	半田	大西	船坂
西本梅村	下新江	竹井	穴人		
	殿谷	埴生	南八田	大河内	
	法京	天引			
吉富村	木原	室河原	池内	玉井	鳥羽
	八木島	大藪	南廣瀬	神田	
	廣垣内	雀部			
八木村	八木	柴山			
富本村	屋賀	北廣瀬	北屋賀	青戸	
	観音寺	西田	刑部	氷所	日置

新莊村	船枝	室橋	山室	野條	池上
諸畑	熊原	大戸	高屋	船岡	越方
川邊村	佐切	天若	中世木	中生畑	木住
世木村	殿田	佐々江	四ノ谷	田原	
五箇莊村	志和賀	保野田	胡麻	上胡麻	
胡麻鄉村	畑郷	木崎	丸生野	内林	曾我谷
桐在村	千妻	岡田	新堂	熊崎	
竹野村	新水戸	水戸	高岡	口八田	

須知町	須知	曾根	院内	森	塩田谷
檜山村	安井	市森	上野	蒲生	
橋丸	和田	井脇	中臺	大朴	
井尻	八田	小野			
梅田村	坂井	東又	水原	上大久保	下
大久保	鎌谷中	鎌谷下	鎌谷奥		
三宮村	保井谷	栗野	妙樂寺	水吞	質
志	三宮	戸津川	猪ノ鼻		
高原村	實勢	豊田	富田	下山	
質美村	質美				
上和知村	中山	枡谷	市場	大迫	長瀬
大倉	藤原	塩谷	上乙見	下乙	

京都府立総合資料館所蔵

見	上粟野	下粟野	細谷	西河
内	佛主			
下和知村	本莊	坂原	廣瀨	才原
	廣野	出野	稻次	安栖里
			小畑	
中	角			
合計	二町	二十一村		
町村役場所在地	大字	官所	國所	実戸
壇生	<small>西本梅村</small>	南大谷	鳥羽	<small>吉留村</small>
			八木	<small>八木所</small>
青石	<small>青戸村</small>	船枝	<small>新庄村</small>	高屋
				<small>川邊村</small>
四ツ谷	<small>五箇庄村</small>	胡麻	<small>胡麻郷村</small>	内林
				<small>桐ノ庄村</small>
竹野村	須知	<small>須知所</small>	橋爪	<small>橋山村</small>
			水原	<small>梅田村</small>
官	<small>三ノ宮村</small>	富田	<small>高原村</small>	質美
				<small>質美村</small>
			篠原	<small>上知知村</small>

學校所在地	園部	尋常高等	講生	同	青石
同	口人	下新江	実戸	壇生	大河内
引	南大谷	鳥羽	八木	船枝	船岡
					中
天若	中世木	生畑	殿田	佐々江	四ツ谷
田原	保野田	胡麻	内林	高岡	須知
橋爪	水原	三ノ宮	富田	質美	篠原
					下粟
野	本庄				
式内神社所在地	志多非	出石鹿	嶋物部	嶋	
日佐	弁奈貴	三縣	石不明	麻氣	麻桑村
					城
崎	<small>桐庄村</small>	多治	<small>五箇庄村</small>	船井	<small>新庄村</small>
産物	ハ米	麥ヲ主トス	副産トシテハ山ノ草ヲ多シ		
トス	上下和知ノ木材	薪炭ニ於ケルヤ	巨觀ナリ	其	

京都府立総合資料館所蔵

ノ大栗搗栗ニ於ケル東京ヲ主トシ四方ニ波及ス
 木崎表ハ蘭席ニシテ木崎桐ノ莊麻氣竹野等之ヲ
 田ニ作り之ヲ家ニ製ス綿ハ八木ヲ推シ鮎ハ和知
 ヲ呼ブ八木ノ桑酒八木ノ島ノ蠶豆等各特色ト別味
 ヲ具フ近來ノ新産ノ大ナルモノハ絲ヲ屈指トス
 須知河邊園部上和知梅田五ヶ莊世木八木等ニ製
 絲場勃興ス
 道路ハ山陰道ヲ本線トシ八木園部須知大久保ノ
 諸驛コノ内ニ在リ以テ東ハ龜岡ニ達スベク西ハ
 福知山ニ到ル可シ東行スルモノハ平坦ニシテ西
 行スルモノハ阻隘ナリ
 篠山街道ハ園部ノ西端ヨリ丹坂ヲ經テ西向シ摩

氣ノ野ヲ過ギ原山ノ險ヲ攀テ原山村ニ下リ西
 野々ニ出テ新處ニテ東シ街道ナル龜岡線ニ合シ
 テ福住ニ入り篠山ニ至ル西野々福住ハ多紀郡ナリ東街道ナル龜
 岡線ハ埴生八田天引人村路山逕ヲ經テ西野々口
 ニ出ヅルモノトス西道共ニ舊新ノニアリ古道ハ
 近クシテ峻シク新道ハ近ニシテ易シ
 園部篠山間ノ原山峠ハ峻中ノ峻ニシテ人行容易
 ナラガリシヲ園部所ノ醬油商人藤坂治兵衛ガ私
 資ヲ抛テ作レル新道ニ由リ牛ニ行ケバ馬モ通り
 車サハ引キ揚ケラル、トトナリタリ治兵衛ノ家
 ヲ萬屋ト云フ故ニ之ヲ萬路ト呼ブ身代富裕ナル
 ヲ以テ萬路ノ名ハ近村ヲ風靡シ其ノ上幾分勇往

ノ氣俠アルヲ以テ人ノ頼ル所ナリキ此ノ山路開
 鑿ノ目的ハ篠山ノ産物ニシテ京都へ出ブルモノ
 ヲ亀岡ニ取ラシメズ之ヲ因部ニ集散セシメント
 シタルナリ其ノ志ヤ好シ而シテ具ノ方ヤ拙ナル
 所アリテ紛紜又錯亂同志ノ分離スルアリ資金ノ
 中絶スルアリテ遂ニハ制裁ヲ司忒ノ局ニ仰グニ
 至リ信施ノ厚カリシ萬路ノ巨店一タビ閉ガテ復
 開カズナリヌ
 天引ノ嶮ナルニ度ビワタリノ名ハ聞クダニ人ヲ
 シテ驚カシム客ノ經過スルモノ天引ノ嶮ヲ望ミ
 テ一度ハ魂消猶又此ノ嶮ヲ望ミテ尚亦魂消ルノ
 意ヲ以テ命シタル名トカヤ丹地元采峻嶮ニ富ム

ム魂消ルモノハ蓋他國人ナラシノミ今ヤ車上夢
 ヲ載セ蘇々地ニ上下ス具ノ險ハ之ヲ東南ニ下職
 スベシ新道ノ古道ヨリ高キヲ數尋ニシテ却テ緩
 ナリ時ヲ競ヒ利ヲ急ク歩客ハ新ヲ舍キ古ニ就ク
 舞鶴街道ニ縁 新道ハ復知ノ蒲生野ヨリ高原ニ
 到リ高屋川ニ沿ヒ柞谷ノ橋ヲ過ギテニ縁トナル
 一ハ左折シテ和知川ノ右岸ニ沿ヒ下和知ヲ通り
 何鹿郡ニ入り山家ニ達スルモノ 一ハ右折シ暫
 時和知川岸ヲ廻リ上和知ヲ通り宇西河内ヨリシ
 テ何鹿郡ニ入ルモノ
 其ノ舊線ハ檜山ニ起點シ三ノ宮ヲ通り草尾峠ヲ
 越エ下和知ノ新道ニ合ス

京都府立総合資料館所蔵

若狹街道 園部ヲ起點トシ園榮橋ヲ渡リ桐ノ庄
 河邊ノニ村ヲ通り大堰川ノ右岸ヲ涉リテ殿田ニ
 出テ田原川ニ沿ヒ五ヶ莊村ノ險路海老坂ヲ越エ
 北東田郡官島ニ入ル
 何鹿郡道 檜山ヨリ北行シ水呑驛ヲ經テ何鹿郡
 ニ入ル同郡山家町ニ達スルヲ得ル故一ニ之ヲ山
 家街道ト云フ
 綾部街道 檜山ノ西半里ニシテ遠キ栗野ヨリ左
 折シ三ノ宮ヲ經テ何鹿郡ニ入り綾部町ニ達ス
 山脈ハ北東田郡ヨリ來リテ南北ニ延長シ走出シ
 觀音峠トナリ海老坂トナリ原山峠トナリ到ル處
 行旅ノ足ヲ疲ラセ具ノ路程ノ迂餘曲折ニ嘆息セ



(館造日機大) 景ノ岩立流上川知和

長

老葛山

山觀音峰ハ山陰道中ノ
 交代ノ大名露士ヲ田部
 メタルヲ木崎ノ西ヲ
 フ獲知ニ達スルノ
 歩ムルヲ者ル
 海老坂ハ北方ノ
 中ノ最峻坂ナリ
 保川ニ沿テテ祖
 長老山ハ郡ノ東
 峰麓地中ノ
 作
 荷
 道
 經



京都府立総合資料館所蔵

長老山



具志



シム観音峠ハ山陰道中ノ最險系中ニアリテ參觀
 交代ノ大名藩士ヲ困却セシメ馬丁荷夫ヲ泣カシ
 メタルヲ木崎ノ西ヨリ路ヲ舟坂ニ作り八田ヲ經
 テ須知ニ達スルノ便ヲ開キ車ノ載行スル人ノ緩
 歩スルヲ看ル
 海老坂ハ北方ノ郡界ニシテ午坂越ノ路程中ニア
 リ葛坂峠ノ北ニ并ブ草尾峠亦北方郡界ニ近ク
 シテ舞鶴街道中ノ一險路トス大朴峠ハ福知山道
 中ノ最峻坂ナリレガ新道成リテ山腰ヲ繞リ大久
 保川ニ沿フテ坦途其ノ多キヲ言ム
 長老山ハ郡ノ東北隅ニ在リテ北東田郡域ヲ侵シ
 峰巒屹々タリ巍然タリ山巔ヨリ眸ヲ放テ巴縹渺

山陰道

丹波 記
裡ニ北海ノ波ヲ看ルベク東ハ加賀ノ山若狹ノ嶽
ヲ望ミ西ニ面スレバ丹後沿海ノ一帶足下ニ来ル
ノ概アリテ丹後ニモ亦海アル半ノ思ヲ駭セシム
著者登臨ノ日ハ天雲無ク秋風頻ニ起コリ楓葉
葉早ク業ニ紅黄ヲ朝ニ嶺無ク谷無ク是レ錦是レ
緋一陣吹キ来レバ荒ビ颯カリ舞降り満身錦緋
裡ニ埋没セラレタリ此ノ山體多クハ北来田郡域
ニアリ由リテ更ニ北来田郡誌中ニ再出セシム
半園山ハ南来田郡ノ南端ニ當リテ立チ本郡其ノ
基礎ヲ形造ル南来田郡ヨリ登攀スルニハ宮川ヨ
リ又ハ千ヶ畑ヨリスベク本郡ヨリスルモノハ平
栢中野大河内赤熊埴生八田等ヨリスベシ九路峰

ノ名由リテ出ヅ山麓ノ蟠踞想フベシ千ヶ畑ヨリ
スルモノハ路迂シテ緩ナリ絶頂ノ俯瞰本州半部
ヲ眸中ニ收ム山ノ名由リテ出ヅ壺ニ半園ナラズ
南望ニ撰山數頂ヲ起エテ一帶ノ青波遙天ト相接
シ望洋ノ觀ヲ登臨ノ客ニ供ス秋天ノ澄清ノ日ヲ最
好トス初夏ニハ躑躅花ノ山色ヲ燒クアリ又一段
ノ風趣ヲ添フ別峰稍扁ナル所ニ瀟水アリテ池ヲ
成シ石菖蒲生フ山僻ノ餐餘カ杜若ノ花ヲ發クア
リ隱者ノ遺弁カ胡黄連叢生シテ麓ニ連ナル本草
家者流ノ採取ニ任ス最頂ノ處ニ角石ヲ建テ測量
點ニ等三角點ノ字ヲ畫刻ス明治初年陸軍省ヨリ
施設シタルモノ龜山ノ儒醫深海皆山人ノ詩ニ云

京都府立総合資料館所蔵

フ

群山臨遠北山崇獨立郊西勢鬱葱市入初冬先有
雪丹物一坐多雪中

其郊西ト曰フハ龜山城外ノ西方ナルヲ以テナリ
河川ニ大堰川系和知川筋アリ然レドモ其ノ源泉
ニシテ大川トスルニ至ラズ此ノ外ニ大久保川ノ
一流アルノミニシテ支流餘裔至ル所ニアリ皆溪
澗ノ濬餘ニ属ス

觀音峠ハ脈勢ニ由リ地勢ヲ兩断シ又分水界ヲ爲
ス

大堰川ハ郡ノ南位ニ當ル埴生ノ南方ノ大河内山
中ニ發源シ摩氣舟坂ニ至リ本梅川ニ會シ旭川ヲ
受ケテ園部市街ノ北方ニ注シ東南シテ鳥羽ノ北
ニテ弓削川ノ下流ヲ納レ鳥羽川トナリ八木ノ東
ヨリ南栗田郡ニ入ル之ヲ園部川ト稱ス

本梅川ハ南栗田郡ヨリ東本梅ニ入り舟坂ニ至リ
園部川ニ會ス
北栗田郡ヨリスルノ一源流ハ世木ニ至リ殿田ヲ
經テ田原川ヲ合ハセ譽流シテ川邊ヲ過キ鳥羽ニ
出テ、園部川トナル

京都府立総合資料館所蔵

大谷川一名胡麻川ハ北東田郡ノ餘懸ヲ收メ胡麻郷ノ東ヲ南流シ殿田ニ出デ弓削川ノ末湊ナル藤田川ニ合シ鳥羽ニ於テ亦國部川ニ合注ス

田原川ハ源ヲ五箇莊ノ宇佐々江ニ發シ殿田ニ下リテ殿田川ニ入り大堰川トナル

和知川系ハ本郡ノ北部ヲ流ル、モノニシテ北東田郡ノ知井ニ發源シ上和知宇柗谷ニ至リ大野川保井谷川ヲ併合シ何鹿郡ニ入り丹後海ニ注下ス

大野川ハ北東田郡ヨリ來リ和知川ニ入ル

高屋川ハ郡ノ北境大國峠ノ東方佛生ヨリ來リ和知川ニ入ル

保井谷川ハ筵尾山中ヨリ出デ須知ノ東ニ及ビ黒瀨ノ北ヨリ和知川ニ入ル

大久保川ハ檜山ノ宇小野ニ發源シ梅田ヲ過キ西流シ天田郡ニ入ル實ニ土師川ノ源流タリ

舟井川 舟井川の源は河内のもろお川よりけし好く流るひまらきよみて

水源ハ大堰川系ニ属スル殿田川アリ保津川ト共ニ角倉了意ノ經營ニ成リ通船ノ便ヲ開ケリ

本系流通船ニテ其ノ源流ニ及バザル丁數年ナリシヲ保津川開通ノ利大ナルヲ以テ遂ニ具ノ便ト利ヲ源流ニ延キ通船通筏田養ノ利更ニ本系流ニ讓ラズナリヌ

和知川系ノ柗谷ニ至ル迄ノ開鑿工事ハ明治二十年

七年ノ設計ニテ知井ヨリ舟筏スバニ北条田郡ノ
 木材コ、ニ陸揚シ牛馬ヲ役シテ山坡ヲ過テ以
 テ大堰川筋ニ下ス
 大野川ハ由良川ノ上流ニシテ疏通切成リ明治二
 十七年一月七日通川式ヲ舉行セリ
 昔ノ名残 和名抄ニ出テタル所ハ
 須知郷 和知莊 城崎郷 土地不詳 刑部郷 船井
 郷 志摩郷 野口郷 鼓市郷 田原郷 出鹿郷
 名所トシテ至基所風土記ニ出テタル所ハ
 西田村 八木村 鼓市村 布引瀧 朝倉山 紅
 村 船岡山 櫻井山 高岡村 高屋村 母祖森
 田植歌 面白や京子車渡り船 ヲヨノ 渡乃船

枝乃川のむの江舟 ヲヨノ 鶴乃子乃葉
 立ハどこトヤハ幡山 ヲヨノ 八幡山藥
 師の森乃若松ニ ヲヨノ 日の暮ニ渡邊ニ
 行けハ子多由ク ヲヨノ 子鳥鳴けハ鳴け
 子多登くらべ ヲヨノ 早乙女衆ハ晝間を
 行ちやるお納戸で ヲヨノ お納戸で帆柱
 立て、風行ちやる ヲヨノ 丹波乃山の午
 年川 ヲヨノ 日黒乃森の松乃垣 ヲヨノ
 正月元日ノ納豆卷一名納豆餅ハ他所ノ雜煮ト同
 ジク早朝ニ喰フ否ヲ祝フト云フ北条田ニ近キ所
 ニ行ハル北条田郡ヨリ南移シタル風習歟 納豆
 ヲ製造ニ置キ搗キ立テノ餅ニテ包ミ塩加減ニテ

喰フ其ノ形頗匾平ニシテ大ナリ古ハ其ノ大ナル
モノ一枚ヲ以テ男子一人ノ食料トセリ著者モ慣
レ又味トテ初ノハ異味トシテ喰ヒ中頃常味トシ
テ迎ヘ終ニ旨味トシテ賞セリ他郡ノ人ニモ振ル
舞ニ度キモノニ社

馬匹試験カ明治二十七年十一月十一日ニ行ハレ
又園部舊城内馬場ニ集ルモノ九十三頭ソノ合格
セルモノ四十頭コレヲモ他郡ニ比スレバ良結果
ト云フ是レハ支那ト合戦スルニ付キ軍用豫備ト
シテノ調査ト聞コエシ 其ノ場ニ在リ合フ果曰
ハク馬匹ハ半数以下ノ合格ナルガ此ノ頃北粟田
ヨリ来ル鹿ハ何レモ見事ナル逸物ナレバ以テ馬

ノ關ヲ補フニ足ル率ヤ獵較シテ逸興ニセハヤト
傍人果曰ハク本郡ニハ二獸ヲ合ハセタル人多シ
獵較スルニ及ハスト一坐哄笑ス

太政官奏沙彌教置俗名上毛野豊麻呂善福俗名水取貞江於船井郡率濫
僧四十餘人殺勸學院使日奉善吉支解具體行火燒
民家二家并燒一女下刑部省令覆案並當斬罪

弓箭組ノ事
門閥ヲ尊ビ武術ヲ尚ブハ皇國人第二ノ天性ト評
スベキ所ナルカ中ニモ丹波人種ホド舊慣故格ヲ
株守シ祖先ノ功業ト世襲ノ格式ヲ墨守スルアル
ハ稀有ノ事項ニ屬スベシ他國ニ全ク無シトハ云
ハジ具ノ團ヲ爲シ隊ヲ成シテ數百千歳保存シ来

京都府立総合資料館所蔵

レルハ稀有ナルベケン
 栗田船井兩郡ニ跨カレル
 舊族故家カ一社ヲ結合シ名ツケテ弓箭組ト呼バ
 ルモノ表ニハ門階ヲ嚴ニシ玄關ニハ弓箭ヲ懸ケ
 武器ヲ陣列シ男子出ヅル必雙刀ヲ佩ビ間アレハ
 射法ヲ習ヒ故武士ノ格ヲ保持スルニ勉メ家庭ニ
 トラ兒孫ニ教ヘ婚娶コレヲ夥伴ニ取ル家運傾ク
 ト雖傳来ノ武器ハ售ラズ去来鎌倉ト云ハシ曉ニ
 ハ直打チ立タンカニ勢ヲ示セリ
 明治四年廢刀ノ令出テヨリ容姿ハ常民ト相慶
 ハラザルモ結合ノ情カハ依然トシテ移易セズ銃
 砲ノ術大ニ用ヒラレ他ノ武藝ヲ壓抑セシモ此ノ
 道ニハ些ノ影響無シ加之具ノ夥伴ニ入ラントノ

冀望ハ衰ハズ其ノ冀望者中ニハ金閤アリテ門閤
 ナキモノ許多ニシテ入隊ノ許否ニハ銅臭サハ聞
 コエテ世評ニ上ルヲモ往々コレアリ日出新聞第
 二千八百七十一號附録ニ弓箭組缺金ナル見出シ
 ニテ左ノ一項ヲ記セリ
 丹波乃玉栗田船井兩郡ニ在リテハ弓箭組ト唱
 え昔より中等以上ノ者ハ殆んど之ニ加監セキ
 ヲ者なく若シ此組ニ加監セキ者ハ人後ニ落
 ちぎらざる得ざる習慣ナリ隨而其乃弊ト訶ラ
 らリしが近年ニ至リテハ大ニ其ノ改良を加ヘ
 之を利用シテ一種尚武の具トシ兵庫臺ト稱ス
 射法を以て年々ニ二回兩郡ニ於而之を催シ若

京都府立総合資料館所蔵

拵料と唱え一人幾何をを出金せしめ軍人優待
 乃通ニ充居りしか今四日清事仗ニ除一去月明正
七年二十九日ヨリ晴天三日の留園部中野教傳
 寺迹ニ大會を催し一人五錢乃出金を集め軍資
 として納納す由云々
 文中稱スル所ノ兵庫臺ナルモノハ之ヲ射法中ノ
 秘トシテ其ノ規矩ヲ公ニセズ之ヲ傳授スルニ容
 易ナラヌ式法口授ヲ要ストカヤ兵庫頭頼政ヨリ
 傳ハリタル所ト云フ其ノ説ニ由レハ鶴退治ノ勸
 賞トシテ當國所々ニ莊園ヲ賜ハリシヨリ其ノ射
 法ヲ基礎トシテ家々ニ行ハレタルナリト一説
 ニ云フ兵部省中ニ兵庫寮アリ寮中ニ射臺アリ以

テ射法ヲ習ハセリ其ノ遺法カ此國ニ存セシナリ
 ト又一説ニ云フ室町氏ノ時ニ小笠原兵庫助ナル
 モノアリ小笠原禮式家ノ本系ニ在テ射術ヲ傳フ
 足利氏衰ヘラ丹波ニ遷隱シ本末合セテ二十七戶
 アリ皆射法ニ善シ後分レテ兩郡ニ散居ス一家傾
 廢セシトスレバ一同相集マリ大弓會ヲ公開シ賺
 金シテソノ費ニ供シ殘餘ヲ以テ其ノ家ノ存續ニ
 供シタリ
 前文中曰フ所ノ其ノ弊モ勦カラザリシトハ如何
 ナル事情ヲ指摘シ出ケセル 升ハ左ノ園部藩告
 諭文ニ由リテ之ヲ知り得ベシ天明五乙巳年八月
 ノ下ナリ

一家柄者身上不如意ニ付弓的興行ハ儀ハ格別是迄も往古ニ通り作法正及弓禮を以て悉令ておの岐而兵以ノ節於的等ニ後負込しハハ、弓取上て中事勿漏不断弓的出合ニ日た送り農業不務ニ者有ニお以てハ可為由事ハ二十有餘家モ今ハ二百有餘戸トナリ新入属々アリテ兵庫臺興行ニハ大人數ノ一團トナリ救濟ヲ名トシテ賭射ノ實ヲ行フ何日何人ノ唱導ニヨリ初マリシカ一勝一負往々家産ヲ蕩盡ス施治者ガ一篇ノ告諭ハ一時ノ救濟ニ止マリシモ慥ニ逆上引下ケノ良劑タリシナリ

近來京都ニ行ハル、時代祭ニハ弓箭組ノ行装列中ニ加ハル升ハ延曆遷都ノ際ニ此ノ由緒アルモノガ弓箭ヲ携ヘテ警衛ニタル古例ト大内裏御造營ノ際ニ京都ノ止回メシタル由緒ニ係カルトモ云フ

安澄法師 船升郡ノ人何村ナルカヲ詳ニセズ河内善談法師ノ法嗣ナルヲ以テ河内ノ人トモ言フ大ニ空宗ヲ啓キ密教ニ入ル當時西大寺ノ恭演ハ弘道ノ大家ナルヲ安澄コレト對峙ス議論風発コレト對語スルノ僧ナニ唯ハ西大寺ノ恭演法師歎手夕リ弘仁五年三月寂ス年五十三

宗旨 禪曹洞宗 百餘ヶ寺 第一位 臨濟宗 第二 眞宗 第三

天台 第四

園部ノ徳雲寺 末寺十餘 胡麻郷ノ龍澤寺 同

摩氣ノ龍坂寺 同

航空隊訪問ノ事 美濃國各務原ノ航空隊ハ大正十年九月二十四日
福知山聯隊ヲ訪問シ園部忠魂碑上ヲ低回飛翔シタル好意ニ報
シガ為且ハ正弘軍曹ノ焼死ヲ弔センガ為ニ本町有志驛金ニテ一百圓ヲ
其遺族ニ贈レリ 何鹿郡綾部町大本教
部ニ出テス參看ス

天明百姓一揆 龜岡町ノ部參看

天明三癸卯ノ年ハ時氣不順農作不況之レニ加テ

ニ痢病流行シ領主ノ同情ヲ得サル農民ハ愁雲ニ鎖

サレテ泣ク々々其ノ年ヲ送レリ

四年五年ハ前年ノ非運ヲ幸運ニス可ク勤ノテ漸ノ

テニテ暮テシ方ヲ立テタリ而モ代官領主ノ憐愍ハ

望マレワリシナリ

六年高價ノ米穀モ取入レ時ニ至リ甲作ナルヲ以テ

差安心シテ年ヲ送レリ

七年下米相場次第ニ上カリ 龜岡町ノ部參看 山野ニ食

フベキ草ヲボタルモノ河川ニ魚類ヲ漁ルモノ日々

ニ増シ盜竊列ル處ニアリ有志者ノ粥施行始マシ

京都府立総合資料館所蔵

十一月七日觀音寺村ノ百姓善藏ガ手作ノ大根ヲ荷
ナレ之レヲ屋賀村ノ方ヘ賣リニ行キ買人アリテ直
段ノ話ヲ為シ此ノ頃ノ難儀話ニ移リ買ア者曰ハク
我等ハ喰ノ米モ麥モ無ケレバ大根ヲ喰フヨリ外ハ
無シ其レモ錢ヤ札ノ有ル間ナリ最早此ノ先ハ別ツ
テキルト善藏曰ハク我等モ同ジ事ナリ有ル丈ノ大
根ヲ賣ツク後ハ何ントナルヤ心細キナリト立話
スル所ヘ一人來リ二人來リ之レヲ聞キテ言フ者ア
リ曰ハク是レト云フノモ不作ノエニ酒屋ノ買込
ミ米屋ノ買込締ノデ我等ノ腹ガ干揚ルノジヤ彼等
ノ家藏ヲ打潰シテ命拾ヒテスル外ハ無イト云フ者
アリ

此ノ話ガ其ノ日ノ夕暮ニハ其ノ村々ニ行キ渡リ中
分以下ノ男ハ三人五人ヒソソ々々同志ヲ語ラヒ合フ
テ夜明カシタル家々少カラズ
十一月十三日山階川原ニ集合スル者アリ
翌十四日ニハ馬路村外川原ニ集合スル者アリ夜ニ
入り火ヲ焚キ勢ヲ示シ兩所相應ズルモノ、如シ村
々ノ番太^{出論}ニ早クモ之レヲ村役人ニ報ジ村役人
ハ之レヲ地頭代官ニ報ス
此ノ時ニ於テ施政者が臨機ノ處分アラシニハ大
事件トハ為ラザリシナランニ馬路村知行主杉浦
氏ノ代官モ目前ノ事ヲ見乍テ傍觀シ居タルゾ是
非モ無シ一里ノ距離ニ在ル領主ノ代官龜山城内

丹波志

ニ安眠シ居タルニ於テオヤ

十八日ノ夜マデハ面々握リ飯辨當ヲ自分々々ニ用意シタルヲシク又ハ村々ノ郷倉番人等が竊ニ取り出ダシテ焚出シ、タルヲシ

十九日前夜渠魁相談、エニテ取極ノル所ノ如ク夜明ケテ待ツテ川ヲ渡リ北ノ庄村ノ酒造家ナル藤左衛門方ヲ目懸ケテ出懸ケ口々ニ荒ラセ々々ト叫ビツ、其ノ家ニ到ルヤ酒造場ニ入り大樽大桶ヲ片端ヨリ打チ抜キ流ル、酒ノ泉ハ流レテ庭ニ溢レテ溝ニ入り道ニ流レハ林村界マテ酒薰紛々又芬々行人之レガ為ノニ心酔ストカヤ土藏納屋一ツトシテ全カラバ衣服夜具遊戯品諸道具皆投ケ出ダサレ

豊柱縁板天开迄ヲ損傷シ主人家族ヲ搜セトモ見エバ手始ノ善シト酩酊飽食シテ誰レ曰フト無ク觀音寺々々ト叫ビツ、進ニ行キ大川ヲ渡リ道々ノ人家ニ入り或ハ飲ミ或ハ喰ヒ善造ノ家ニ到リテ惣潰シノ亂妨ヲ働キ更ニ杉村ノ定右衛門へ押寄セタリ大膽ニシテ惡マレモノ、主人ハ其ノ來ルヲ豫知シ計畧ヲ以テ之レヲ退去セシメント家奴傭夫等ヲシテ藁ヲハ屋ヨリ出ダシテノ屋敷ノ外側四方ニ積ミテ火ヲ掛ケ一人モ寄セ附ケヌ様ニ為シ身ニハ重代秘藏ノ鏝兜ヲ着シ少シ腕ニ覺アルヲ以テ長槍ヲ擲ヘ玄關前ノ床几ニ倚リ居タルガ暴徒ノ内少々腕ノ利キタル村相撲ノ輩四五人前後左右ヨリ寄り附キ

クレバ定石衛門ハ狼狽シテ働キ得ズ其ノ形態ニハ
似モ附カズ一ニ拳骨ヲ參ラレ槍ハ奪ハレ武具ハ脱
ガサレテ土足モテ踏ミ折ラレ詫ブルモ如何テ聞カ
バコソ追ヒ懸ケラレ乍ラ隣家ノ垣ヲ破リテ逃ゲタ
リケル
此所マテハ節制紀律ノキタル所無ク面々思ヒ々々
ノ舉動ナリシガ此ノ時ヨリ殆令テシキ辭ノ出デ來
テ馬路村ノ三軒屋川原差シテ引キ取ル際ニハ進退
能ク整イタリ
二十日夜ハ馬路河原尻兩村ヨリノ焚出シ慰勞ヲ受
ケ兵糧ノ用意ナニ分黨勢愈熾シニ野次馬連中ノ面
白半分ニ加ハルモノ多ク壹萬人ハアリタラントゾ

云フナル
翌二十日ニハ八木ノ鳴村ノ丸屋次兵衛ヲ襲ハン
トテ早朝大川ヲ渡リ其ノ家ヲ破却スルト前數家ニ
於ケルニ同ジ前勢上河内村ノ宗八方ニ着手スルニ
後勢ハ鳥羽村ニ在リ之レヲ見ントテ集ムルモノ
近郷近在ヨリ幾許ナルヤヲ知ラズ暴徒ノ惣勢ヲ見
ントテ山々ニ登リタルモノ、談ヲ聞クニ惣體ヲ四
萬有餘ト云フ而ルニ實數ハ其ノ半ニモ至ラズ何
故斯ク多數ニ見エルト曰ヘバ弁ハ天狗ガ所為ナ
リ云々暴徒ハ宗ハガ禮服ヲ著ケ平伏謝罪スルヲモ
顧ミズ酒食ヲ兼テ準備シ置キタレバ之レヲ差シ
出シタルヲモ省ミズ絹物藏木絹物藏草履草鞋藏杓

明
城
志

子藏木倍子藏ノモ破壊シテ貯藏セル物品ヲ兩打夕
 シニセリ此ノ家ニハ領主ヲ饗應セシガ為ニ新築セ
 ル御成御殿トテ金箔銀箔ノ襖ヤ黒柿ノ天井板ヤ唐
 木造リノ床ノ間ヤガ有リタルヲ悉皆粉微塵ニ為レ
 了レリ何卒此所ヲ果トシテ引キ取りテ下サレト懇
 談シタルニ加勢ヲ出サバ其ノ意ニ從ハント云フニ
 ガ己ムトテ得ズ村役人相談ノ上倔強ノ若者五十人
 ヲ擇ミ隨テ行カシム宗八ハ貯藏銀三百貫匁ヲ前日
 竊ニ檀那寺へ預ケ置キタルニ一揆ノ暴徒ハ心ヲ留
 ノズ斯ハ宗八方ノミナラズ到ル處金錢ニハ心ヲ留
 メザリレトゾ宗八ヨリ差シ出ダセル歟願書面左
 ノ如シ

困窮ニ砌劣事言直ニ賣買ハ儀不禱法ニ有
 湯免可シ下々此以て及半直段石ニ付六十匁
 酒を升ニ付五匁ニ分同ノ粉をノ匁ニ付三
 分

右ニ通年相違賣押テ下々仍如件
 十一月二十日 上河内村宗八印

多人数様

一揆ノ徒退却後ハ一邸完物無キ荒地ノ中ニ不思議
 ニミ一木箱ノ完全ニ存在スルヲ見ル打テ寄リ之レ
 ヲ檢スレバ法華經ナリ泥土ヲ洗ヒ落トシテ之レヲ
 開ケバ粲然タル紺紙金泥ノ八卷ナリ之レヲ見聞ス
 ルモノ皆希有ノ思ヲ為セリ而ルニ其ノ家ハ經宗十

京都府立総合資料館所蔵

アゲリシナリ
此所ヨリシテ一揆ハニ手ニ別カレ東西兩軍ト云フ
之ヲ見聞シテ或ル人ノ曰ハク斯クテハ一揆ナラズ
ニ揆ナリト具ノ一部ハ園部ニ向テ一部ハ江嶋里ニ
入ル西向ノモノハ園部町ニ入リントスルヤ藩兵之
レヲ許サズ茲ニ初ノテ戦争状態ト為リテ雙方負傷
者ヲ出タズ保津村ノ清吉ハ逃ゲ歸リ疵養生ヲ為マ
シヲ番太ニ捕縛セラレ三十人ハ藩兵ノ捕虜ト為リ
暴勢少シク挫ケタル所ハ篠山藩ノ援軍到着シニ藩
勢ヲ合セテ弓銃發射ナセシカバ暴徒初ノテ恐ル
所ヲ知り辟易退去シ町民安堵シタリ
此ノ一隊ノ暴徒ハ池上村ニ退キ終夜大篝火焚キテ

休養スルノ體ナルガ近傍諸村ノ役人ハ嚴霜ノ朝モ
暴雨ノ夕モ禮服着用ニテ暴徒ニ追従スルゾ哀レナ
シ
廿一日ヨリ廿三日ハ懸ケ南桑田郡ヲ荒ラシクル一
組並岡所ノ部ハ北行シテ又一團ト為リ八木鳥羽其
ノ他所々へ入り込ニ飲食ヲ恣ニシ居タルガ園部藩
ハ前日ヨリ目明^{メアカ}探偵役數人ヲ放チテ一揆ノ中ニ加
ハラレノケルガ走セ歸リ之レヲ報告スルニ由リ前
日ノ生擒^{ナグ}者ニ出ニ二十五名ニ傘ヲ與ヘ支度ヲ為セ負
傷者ヲ治療セシノ負傷ノ輕重ニ應レテ金百匹^{金四一}
分ノ二百匹^{金一兩}ヲ與ヘ草鞋ヲ給シテ放還シタレ
バ之レヨリ暴徒モ稍反首スルノ傾ヲ生ゼリトテ此

町誌

ノ行為ヲ稱賛スルモノ有り

誰レ謂フト無ク今ハ是レ迄ナリトテ歸村スルノ傾
向アレバ渠魁モ之レヲ抑止スルニ由無ク解散ヲ觸
レ約束シテ曰ハク此ノ一件ニ付一同ヲ嚴敷キ科ニ
落トス^アアラバ走回ノ鐘當時ハ西部神道ナルヲ以
テ鳴ラシ夜中トテバ犬ヲ揚ゲテ知ラス可ケレハ早
速ニ集マレト命令的約束ヲ發シ村毎ニ人數ヲ纏メ
各自悠々然トシテ退去歸村セントシ川聲ニ至リ定
右衛門ノ水車ヲ見テ是レヲ仕收ノニ打テ壞セト曰
フ者アリ夫レ宜カテント應ズル者アリテ忽ニ粉碎
セラレ之レヲ終リトシテ歸村歸宅セリ京坂ニテ南
宮忠藏米屋伊三郎其ノ他茨木村ニテモ大和國ニテ

モ米穀買占ノ為ニ入牢シ獄中ニ死セルモノ數人ア
リ孰レモ此ノ騒動誘起ノ關係人ナリトゾ園部藩ニ
於テハ龜山藩ノ如ク京獄ニ送リタル^一無カリシト
カヤ

園部町記事

本町ハ南ニ小向天神鐘撞ノ三山ヲ負ヒ北ニ園部川ノ流域アリ四方膏腴ノ村邑ニ接シテ本郡ノ都會トス東西十一町三十間南北七町アリテ宮町上本町若松町新町等ノ六坊アリ

戸數	五百	二百八十	二百八十	二百八十
人數	二千二百二十	二千	二千	二千
三	十	十	十	十

郡役所	舊城内	收稅部	同	警察署	町役場
區裁判所	城内	船井南北東田ノ	三部ヲ管ス		
郵便電信局	園部銀行	貯蓄銀行	高工銀行		
製絲會社	俱樂部	金庫	養蠶所	養蠶傳習	

園部町志

所 高等小學 尋常小學

若狹街道ハ北向シ篠山街道ハ南向シ復知街道ハ

西向シ而シテ龜岡街道ハ東向ス

里程 京都三條大橋ハ龜岡ヲ経テ十里 龜岡ハ

八木ヲ経テ四里 八木ハ二里 綾部ハ十里 福

知山ハ十三里 篠山ハ七里

右何レノ路モ山又溪ヲハ龜岡ハノ路ハ平坦路ノ

如シ 和漢三才圖繪ニ云至江戸百三十一里

鐵路停車場 八木間四哩 龜岡間九哩 嵯峨間

十五哩二十五鎮 七條間十八哩三十七鎮 二條間二十哩

橋 園部橋 常盤橋

祭禮 天瑞宮 九月七日 園部町園部村共同祭禮ヲ

行

監視區 軍事上ノ管轄事務徵兵ノ下ヲ掌ル二十

九年福知山聯隊區ニ統轄セラル、ヲ以テ當地在

末ノ官衙ハ廢止セラレタリ

名物 辛板 五色辛板アリ 鮎 栗 柿 松茸

等アリ

公園 園部村地内ニ屬スルヲ以テ村記ノ所ニ入

ル就キ見ヨ

柘並木 東海道ヲ主トシテ五海道ノ兩側ニ松ヲ

栽ウル、徳川幕府ノ控ニシテ夏ハ大名ノ參觀交

代ノ日除トナリ商旅モ亦コレガ爲ニ冬天ノ風雪

ヲモ防グノ便ヲ得タリシガ維新後何處モ廢絶ニ

京都府立総合資料館所蔵

危シトス園部ヨリ京都方面ニ赴ク道里數所ノ間
リノ攸ヲ存ス柘木伐拂植足シキ入等ハ幕府ノ代
官所支配ニテ注意深カリキ
古時園部ト書ケリ 神八并耳命ノ後園部トナリ
自後朝廷ヨリ園部ヲ置キ其ノ目ヲモ置カレシ所
ナリレガ爾后數沿革ノ後ニ地名ト爲ル菅原氏ノ
叢祖野見宿禰カ殆死ヲ止メタル功績ニヨリ賜ハ
リタル封邑ノ一ニシテ道實公左遷セラル、迄連
綿其ノ家ニ屬シタリ其ノ後丹波守ノ管地ナリシ
ヲ源氏ノ管轄トナリ永正年間足利氏ノ有ニ歸シ
天正年間自補園部守波多野ニ屬シ車軍防禦ノ爲ニ
同苗秀治コ、ニ城ヅキ其ノ臣荒木氏綱ヲシテ守

ラシム其ノ七年織田氏ノ將明智光秀ノ爲ニ攻滅
サレ光秀僅ニシテ七ニ織田ノ故將柴田權六勝家
ノ管領スル所トナリ其ノ十八年丹波少將豐臣秀
勝ニニ居リ元和五年小出吉親氏ノ封セラル、所
トナリ爾後維新ノ大慶革ニ終ル幕府ノ末路天下
多事各藩相競ニ武備是レ治ム當藩之ニ習ヒ幕府
ニ乞ヒ朝廷ニ請ヒ山上ニ櫓ヲ構ハ土堀ヲ築キ小
城郭ノ外觀ヲ街ニ得タルヤ好シ如何ニセシ内實
ハ之ニ及シ之ヲ守ルノ兵卒無ク其ノ實用ヲ爲サ
ズシテ明治四年辛未版籍ノ返上ト共ニ朝廷ノ有
トナリ今ハ公園トナリ其ノ遺蹟ヲ存ス當時ノ園
部藩主即十藩知事小出英尚氏ハ妻子ヲ具シ舊臣

丹波志

二 離別し東京貫屬ノ華族トハナレリニ萬石ノ地
 ヲ管セシ地ナルヲ以テ政廳ヲ設ケ園部縣ヲ置キ
 タルガ同十二月廢縣シテ園部村トナリ京都府下
 トナリ町制施行ニ際シ園部町トナリ園部村ト
 ナレリ
 小出吉親ノ但馬ヨリ來ルヤ実戶村ノ小富太郎兵
 衛ガ家ニ寓ス実戶ハ即チ実人ナリ三年ニシテ建
 築成リ元和七年移徙ス西惣兵衛善請奉行ニテ設
 計築成シタルヲ左ノ如シ
 一 惣郭堀外南北六町東西四町 但ニ度渡シ
 一 惣廻リ二十一町二十二間 但ニ六十間ヲ一町トス
 一 侍家數七十七軒

一 町數六町 家數四百三十軒餘
 一 官町新貫御門ヨリ札ノ辻迄二町半五間
 一 本町上ノ町柵形ヨリ下ノ柵形迄三町二十九間半
 一 下ノ柵形ヨリ新町柵形迄三町半二十九間
 一 札ノ辻ヨリ馬場出口迄横町半町五間
 一 裏町上ノ町ヨリ下ノ町迄二町半十六間
 一 袋町堀端ヨリ官町口迄五十三間
 一 釘貫御門ヨリ新町下ノ柵形迄十町十四間半
 一 二重堀ニ扶間ヲ附ケ櫓ハ之ナレ
 右ノ内ニ侍ノ家數少キハ何故ナルヤ七八十戸ニ
 テニ萬石大名ノ臣下ヲ容ル、能ハズ當時草創ノ
 際數家同居シタルモノカ戰國ノ餘風ニテ獨身生

活ノモノ多カリシニヤ維新ノ際ニハ士族ノ家數
三百アリシ明治二十九年ニ戸數五百餘ト注セラ
ル元和ノ頃ニ比較シテ大差ナク且五百戸中士族
ノ家ヲモ混入シタルナレバ減少シタルガ如ク聞
エルモ并ハ町ヲ譽ゲテ村ヲ除外シタルモノカラ
自然其ノ減耗ヲ見ルナリ當時ハ園部ト云ハハ町
村ヲ混合シ士族ハ戸數外ナリシナリ
香林寺 園部西北十五町ノ所ニアリ菅洞宗 創
建正徳二年 山号祥園山ハ山名モテ附ケタルナ
リ山ノ半腹ニアリ園部ヲ瞰ルベシ川ヲ臨ムベシ
萬福寺 萬福寺山ノ半腹ニアリ園部藩老長瀬家
ノ菩提所トシテ其ノ建造スル所ナリ風景ノ好キ

前寺ノ如シ
舟筏 神田河岸ヨリ保津川ニ下ル夏季農用ノ水
トナルヤ通漕ノ便ヲ失フ
小麦山ハ菅原氏別墅ノアリシ所ニテ道實公モ數
次來遊セラレシ所ト云フ著者惟フニ菅公ハ遊行
ヲ好ムノ人ニアラズ且ツ當時コノ僻地ニ來遊セ
ラル、トナド思ヒモヨラス是或ハ民路ニ心ヲ用
ヒ領地ヲ來檢セラレシニハアラザルカ公ノ遷謫
セラル、ヤ藤原氏ノ壓迫過盛ナリシモ武部源造
ト公子慶能トヲ領民ガ輾轉佐佑シテ危機ヲ避ケ
シメタル如キ公ノ德澤ハ民心ニ洽ネキノ致ス所
ナルヲ知ルベキナリ次ニ示ス所出迎ノ松ニテモ

町
枝
志

公が来園セラル、ノ一再ナラザルヲ證スベシ
山ニテ詠メリレ歌

谷川の霧ふらふ海に似てなみよとまらふ松風の音

所言 伊達政宗が山家露ト云フ題ニテ詠メル

歌ニ 山乃乃^の霧^のふらふ海^に似^てなみ^よとま^らふ^松風^の音

きくと松風の音ト云フガアル政宗其人

が管公ノモノヲ踏襲シタリトモ想ハレ

又蘭合冥符ニヤ

出迎ノ松 武部源造が主君来園ノ際コ、迄出デ

候迎シ此ノ長松ノ下ニ蹲踞拜謁シタリト云フ

園部所ノ東端ニアリシガ今ヨリ八十年前枯死セ

リ著者コレヲ故老ノ目睹セルモノニ問ハリ公ノ

来園ニハ源造が領民ヲ引率シテ候迎スルノ例ト

ナレルモノト云フ

藩士問答 洛水ニツキ

先生^{著者}ナドニ園部藩ナシカノ小サナ^クヲ御話

シ申スハ嗚呼カマシウガガリマスシ殊ニ私ナゾ

ハ小身者デ手代同心ト申スモノ中々以テ口ヲ利

クナドハ出来マセヌ一家老ノ長瀬モ私モ同シ京

都府ノ士族デハハハハ長瀬五郎ト御交際ガアレ

セラレマレタカアレハ分家ノ長瀬デ馬廻リノ

身分デゴザリマシタ私方デスカ同心ト申シマ

シテ足輕ト同等テ手代ト申シマスト代官ヤ普請

方ノ下役トナリマスノテ別ニ換ハリハゴザリマ

町
城
志

セマ 始終川掛リノ方ハ廻ハサレテオリマシタ
中々事ノ多ク役デ始終出ヅノデゴザリマシタ
至家ノ領分ニハ大川ト申ス程ノモノハ無イデシ
夕カ 出水トナリマスト北粟田ノ方カラドニ
馳セ出シマス鳥羽アタリノ堤防ガ危イトノ知ラ
セガ参リマス 左様デゴザリマス七八合ノ水デ
ハ其ノ地々々々ノ百姓ガ働ク計リテ宜イデスガ
最早九合以上トナリマスト其ノカニ及ビマセマ
故庄屋カラ急ノ知ラセガ参リマス 私共ハソレ
マデニ出張スル筈ナノデスガ 鬼首ソノナシデ
知ラセガ参リマスト走リテ出掛ケマストデゴザ
リマス 私共ニハ享和寛政度ノ定メノ通りヲ遣

ツラ斗マスガ水ハ中々其ノ時節通りヲ守ワテ呉
レマセズニ年々水嵩ガ増シマスニハ同役ト上役
ト顔見合ハセテ開口シテオリマス デスガ其ノ
水カ引キサヘ致シマスト直ト忘レテ仕舞ヒマシ
テ根本療治ヲ急リマス故又翌年モ同時ニ同シ心
配ヲ致シマス一時ハ上役共々命掛ケテ陸ノ上ニ
立チマス其ノ時ハホシニ安イ命ビヤナト感ジ
マス ハ一三石五人扶持ヤニ石三人扶持ナド色
々ゴザリマス 左様水カ引キマスト百姓等が一
盃飲マシマスト其ノ味ハ忘レテマテマ一盃トハ酒ハ
カリテハ無イト
ベシルテ同役モ上役モ此ノ造リハ公儀善請ニ願フガ
好イ又アレカ當然デアル連モ此ノ調子デハ小藩

河内
志

ノカデ支フルハ出来マト申シオリマスガ是
ガ又着々トハ参リマセ又巡見使ノ参リマスル時ヤ
京都町奉行ノ普請方山方ナドが見廻ハリスル時
ニ當藩ノ役人カラ申シ出ヌデハ無イデスガ中々
取リ用ヒテ呉レマセナシダ左様デス公儀普請
ハ大工事ヤ由緒アル所ハ幕府ノ役人が出張シテ
工事ヲヤリマス 大工事ニナリマスト吟味役ノ
勘定奉行下役ナドが参リマスシ又之ヲ京都町奉
行ニ委任シマストモゴザリマス 左様ニマスル
ト與力一名同心ニ名位が参リマシテ其ノ地ノ
百姓ヲ雇ヒ入レテ働カセマス 公儀普請トナリ
マスト中々下等トモニデゴザリマス 出役ノモ

ノハ本陣ニ宿泊致シマシテ時々巡見致シマス
何時デモ拍子木ヲ相圖ヲ致シマス休ミモ食事モ
ソレデ致シマス 公儀普請ニナリマスト藩カラ
御馳走役ナドが機嫌ヲ伺ヒマスル差圖ヲ受ケニ
出マスルナド中々骨が折レマス 若ヤ機嫌ヲ換
シマスト大慶デス仕事モソロシクデハ癖ニ藩ハ
ハ掛カリモノヲドツサリサセマス夫レ故小々ノ入
費ニハ換ヘラレマセヌ 其ノ本陣デスカ葺建具
床ノ間ノ飾リマテ一切藩ノ物ヲ用ヒ藩ノ入費デ
スガ宿泊料中食代ナドハ幕府ノ入用デ勘定方
が附イテ居マス 雨降りデスカ其ノ日ハ仕方ナ
シニ本陣ニバカリ居マス 人夫ハ玄米一升ツ、

町
志

テアワタト存ジマス 本陣ニハ白キ幕ニ黒ノ横
筋デシタガ幕府ノモノヲ引キ表ニ水桶ヲ三ツ産
ネ左右ニ置キ白砂ヲ盛りマシタ様ニ覺ハテ居リ
マス 自身審ト申シマシテ村カラ百姓ガ代ハル
ノ一當直致シマシテ非常ヲ戒ノマス 疊一枚敷
位ノ小屋ニ二人詰ノマス 藁デ拵ハテ幕ノ棟ナ
モノト同ジテ産依ニ竹ヲ衝キ差レ圍扇ノ様ナ形
ノモノヲ小屋ノ前横ニ立テマス ナシデモ昔ノ
火防道具ノ形ニタルモノト思ハレマス 其ノ工
事ガ滞リナク海ニマスト藩カラ重役ガ挨拶ニ出
テ大勢ガ八木アタリマテ見送りマシタ様ニ覺ハ
テ居リマス 町奉行ノ方ノハ左様ニ大層ニハダ

ガリマセヌ様デゴザリマシタ 一ヤ世間ガ騒ガ
シウナリマシテカラハ私ナドノ役前ハアキラヘ
ノケテ領分界ノ番所々々へ出張サ、トマシテ武
役ト早撫リ致シマシテ山方ノ川方ノト申ス差別
ハ無シニナリ調練モセニヤナリマセヌ又銃モ打タ
ネバナリマセヌ スルト今迄ノ様ナ鎗カデハ行
ケマセヌ俄ニ磨カス鎗ノ緩ルシガノモ修繕セネ
バナリマセヌ 其ノ上ニ渡リ具足ヲ受取りマス
ルニテ着用スル誓古ニ取懸テネバナリマセヌト
云フ塩梅テ藩中上カラ下ハト戰場ニタ様ニナリ
隄防ヤ山林ハ迄モ見返ル隙ハゴザリマセヌ
村々カラハ前々ノ通り申立テマシテモ行ケマセ

町奉行
志

又町奉行所へ願ヒ出マシタ所ガ浪人ノ取り押
ハヤ京都ノ訴訟事ガ多イト云フテ来テ呉レマセ
又ソコデ藩カラ村々ノ役人へ委カセマシテ
ソコ好イ加減ニ遣フテ置イテ呉レ手が透イタラ
見分スルト云フ様ナ其ノ時逃レノ丁テ置キマ
シ夕故年々川床ガ高フナリ堤防ガ昇フナリ毎年
夏時ニハビクスル丁トナツテ仕舞ヒマシタ
御維新ニナリ定メテ好フナルデアラウト思フテ
居マシタガ矢張り其ノ時逃レノ工事ノミデス是
テハ案ジラレマス如何ニナリマスカシラン
果シテ維新後水患少カラス別項水患記事アリ
鳥羽ノミナラズ園部亦然リ

明治四十年八月度洪水畧記

八月二十四日より雨ハ降りシキリタルモサセル
驕ギモナシ
二十五日終日尚降りシキリタルモサセル騷ギモ
ナカリシニ夜九時半俄然洪水ヨ大水ヨト叫ガ隣
シ人ニ相報ジ警告ソレカラソレハト傳ハテ東
西ニ奔走シ南北ニ馳驅スルモノ次第ニ増セリ
園部川満チ溢レ橋モ今ニ崩壊セントス堤防ニ
ハ亀裂ヲ生シ濁水沁ヒ出デタリ夜ノ更ルト共
ニ浸水ハ益々推シ来リ町々ヲ流レ出セリ
警鐘ノ響モノ凄シ併シ雨聲ノ繁キニヨリ遠クハ
聞元ナリシ午前四時大ナル響キハ聞元マ
ガ

町誌

別テ又後ニテ聞ケハ大橋ノ落チタル音ナリシト
云フ堤防カ橋材ニ衝キ當テラレ潰崩セル音ナ
リト云フ此ノ時二十四所破壊ニタルナリ今
迄ハ濁水来ルモ低地ハミ々ト流レ行クモノ而
已ナリシガ今度社ハ大波小波トナリテ全所ヲ
湖水ニシタルナリ五百八十一戸ヒタト潰サレ家
具運ヒ出ス間ヨリモ水ノ到ル早サ着ルガ内ニ床
ニ達シ天井ニ達シ簷ニ達シテ逃ゲヲクレタル者
ハ屋上ニ叫ビ逃ゲ得タル老幼ハ啼キ叫ビワ、高
所ニ逃ゲ又ハ逃ゲシメラル、途スガテ水ハ足ラ
没シ轉テアリシコアリ
川ニ浜ヒタル處ハ裏口ヨリ板戸ヲ押破リ来ル水

勢ニ押サレ濁水ト共ニ悲鳴ヲ舉ゲワ、逃ゲ来ル
モノ引キモ切ラズ午前五時ヨリ退水シ始メタ
リ
同二十六日午前十時町役場復ハ公會堂高等小
學校ノ二箇所ニ詰切リ焚出シヲ始メタルニ間キ
傳ヘテ集ヒ来ルモノ千餘人焚出シノ米屨々々缺
セントシテハ補充セリ人口二千百六十一名擧リ
テ斃者タリマ官衙公所ハ害ヲ被リテ全キモノ
幾個モ無ク川ト云フ川橋ト云フ橋全キモノナク
行衛不明壺名溺死者三名流失家屋三戸ヲ被リ
牛馬ノ屍體ノ上方ヨリ流レ来リテ竹林ニ引懸カ
リ濁流ニ弄ラレ爲ルアリ並木ノ柵ハ算ヲ亂シ

町
被
志

トレ 土砂青田ノ上ニ布キ 道路ハ家具家畜ノ
死体ニテ泥マミレノ儘ニ埋レ 萌玉ガ株ニ籬ニ
懸レルアリ 一種言フ可ラザル臭氣鼻ヲ撲ワ
誰ガ射初ノケン前岸トノ交通ハ矢文ニテ互ニ射
合フテ見舞フアリ無事ヲ報ズルアリ 對岸モ一
面ノ波浪ニテ堤防樹木遠村ノ見ユルノミ 前岸
ノ白煙ハ何屍體ヲ焚クノ煙 今曉茅屋一軒ヲシ
テノ火ヲ點ビタル儘流レ来リタルガランポ顛倒
シタルニヤ一點光消ユルト見ル間ニハツト燃ハ
出シ茅屋一面ノ火トナリ一大火團ガ洪波ノ上ヲ
流レ行ク中ニ叫喚ノ聲初メノ内ハ聞エシモ終ニ
ハ聲サハ聞ヘズナリ又後ニ聞ケバ桐ノ左ノ人家

ナリレト
雨量 二十三日午前八時四十七分ヨリソロソ
降り出セルヲ始メトシテ本日午前九時五十六分
ニ至リ八十三粒一ナリ之ヲ一坪ニ割リ安ツレハ
都合ニテ壹石四斗六升五合八勺ナリ
調査ハ出来テ報告セリ 流失家屋ニ 潰家ニ
床上ニ尺浸水五百戸 床下浸水ニ十戸 浸水セ
ガルモノ九戸 死傷者無之 二百羊采ノ洪水ト
新聞探訪員報シテ曰ハク園部町民ハ只茫然タル
ノミ
内務省ハ治水ノ根本策トシテ去ル二十九年ニ河
川法ヲ發布シ次テ翌三十年ニ至リ沙防法ヲ發布

京都府立総合資料館所蔵



北条
 修状
 舟に舟りて
 海人もや
 秋の水

ナリ
 ト北海道トヲ太甚ヒトス丹波ノ如キハ少害ノ分
 九十六萬圓ニシテ新潟茨木栃木長野福岡ノ諸縣
 シ爾来平均一々年間ノ水害損失價額ハ二千六百

京都府立総合資料館所蔵

田井源七

田井源七八園部ノ人ナリ性頗ル謙讓ニシテ人ニ
逢フヤ輒叩頭敬禮ヲ隣人ニ於ケルモ然リ親戚ニ
於ケルモ然リ兄弟ニ於ケルモ亦然リ是ニ於テ人
渾名シテヲジギノ源七ト云ヒ又ヲジギサント云
ハハ即チソノ人ナルヲ知ルニ至ル親ニ事ハテ至
孝ナリ二十歳ニシテ父ヲ喪ヒ母ヲ養フ事二十有
餘年未タ一日モ疾言遠色アラズ常ニ云フ妻ハ再
ビコレヲ得バヤモ母ハタバコレ一人遂ニ昂ツベ
キモノナシ如何ゾ之ガ奉養ヲ怠ルベケンヤト家
食ニク僅ニ乾魚ヲウリテ口ヲ糊ス然ルニ母ノ嗜
好ヲ問ヒ滋味ヲ進ノ之ニ言フニハ敦居ヲヘダト

跪キ頭ヲ下ケ恰モ貴人ニ對スルガ如シ母ノ起キ
 テ庭ニ下リシトスルヲ見レバ直ニ至リテ履物ヲ
 整ヘ體ヲ擁シテ其ノ仆倒ヲ戒ノ或ハ畜ニテ蕩暮
 家ニ歸ルヤ茶ヲ沸カレ足ヲ濯ヒ神棚ニ燈明ヲ供
 ハ母ト共ニ食ス芽妹ノ來ルアレバ悠然之ヲ延キ
 其ノ善ク訪ヘルヲ謝シ自ラ茶ヲ煎ビ之ヲ進ムル
 等敬意懇到ノノ妻ニ語ルニモ敬語ヲ以テレ一家
 輯穆ニ御黨感セサルハナシ事聞ハ藩主鳥目若干
 ヲ以テ其賞トス明治三年十一月二十九日死ス年
 五十四

園部村

園部村 大字 園部 小山 大村 横田 黒田
 本村ハ東南西ノ三方矩形ヲ成シテ園部町ヲ環リ
 町村同名同胞ノ關係ヲ相成ス五部落ヲ合セテ一
 村トナレルハ村制施行ニ便センガ爲ナリ明治二
 十九年ニ於ケル戸數ハ四百二十人口ハ二千百八
 人文久年度諸村高左ノ如シ孰シモ園部藩領ナリ
 キ
 園部村 二百九十五石七斗一升六合 小山 五百
 石三斗二升六合 上横田 百二十一石七斗四升
 四合 南横田 三十八石九斗六升 下横田 二
 百八十五石九斗六升 大村 三百六十八石六斗
 五升 黒田 三百七十九石五斗三升六合

町
 部
 志

産物 米穀 藺

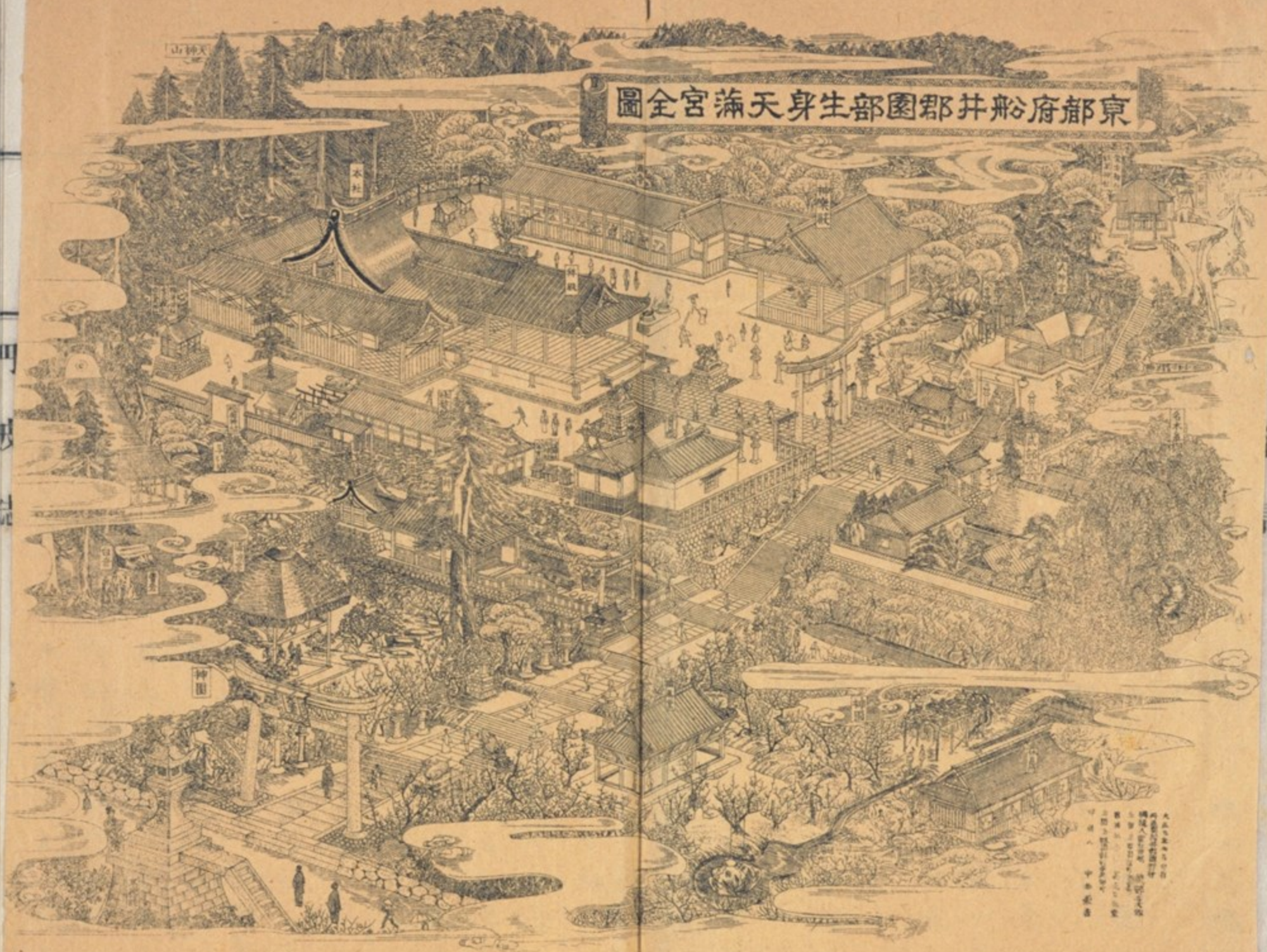
小山ハ園部川ニ沿ヒハ木ニ通ル道路アリ十里
松ト呼ベリシ松並木アリ夏日行旅カ炎熱ヲ避ケ
タル所ナルカ廢藩後枯死ニ任セタル結果漸次ソ
ノ攸ヲ失ヘリ 寶曆十二年十二月ニ幕府四方ニ
令シテ並木ヲ植エシメントシ東海東山日光奥州
甲州ノ五街道ヨリ實行セシメ其後諸道本支ノ別
無ク普ク之ヲ實行セシム勘定方普請方コレヲ見
分ス幕府ノ制ニ御勘定方アリ御勘定吟味役アリ
大小工事會計ニ關係アルモノハ之ニ關テガル無
シ然ル所以ハ大名ニシテモ其ノ力ノ能ハザル所
ハ幕府ノ助カヲ仰ガザルヲ得ザル故ナリ其ノ國

主大名領地ニ入ラザリシハ其ノ獨力管轄ニ堪ラ
ルト封建勢力ノ強大ナリシニ因ル
足利尊氏旗揚ノ地ナリトノ口碑アリテ南栗田郡
篠村ハ幅官前ノ舉ト相衝突ス土豪莊林ナルモノ
、祖先カ第一番ニ應援シタリト傳フ此處ハ策源
地ニテモヤアリシ
城跡 長曾左衛門ナルモノ居住ニタルヲ細川兵
部大輔之ヲ攻落スト云ヒ長濱沼部大輔コレニ居
守セリト云ヒ事跡ノ分明ヲ欠ク
大字黒田ハ園部町ノ南西ニ當ル 産米良好 塚
穴アリ
親慶寺ノ觀音堂ハ往時摩氣村ノ摩氣神社境内ニ

丹波志

丹波
洲
誌

了リシラ此處ニ移齋シタルナリト一株ノ老櫻枝
 茂リ花多ク春季園部人ト引ク
 本瑞山妙光寺 園部町ノ西北四町ニアリ日蓮宗
 本尊釋迦如來多寶塔 青面金剛ハ運慶ノ作ト云
 フ北辰妙見大士ハ加藤左馬助ノ持念佛 日蓮ノ
 親筆アリ日蓮六十一歳ノ真影アリ龜田玉英ノ花
 馬畫幅アリ 本堂庚申堂妙見堂等アリ 地域七
 百餘坪アリ
 園部天満宮 舊稱生身天神 當社ハ格式ニ於テ
 ハ郷社ナレドモ由緒正シク靈驗イヤチコナル古
 祠ナリ シラ天満宮トハ何處モ同ジ管神ヲ祭ル
 所 柳コノ園部莊ハ菅原家ノ鼻祖ナル野見宿禰



京都府船井郡生身天滿宮全圖

京都府立総合資料館所蔵

か殉死ヲ止メタル勲功ニヨリ賜ハリタル封土ニ
シテ子孫コレヲ襲封シ道真公ニ至ル公カ左遷ト
共ニ官没セラレタリ園部ノ人ニシテ仕官シ左衛
門尉トナレル武部治定ハ京都ニ在リテ公ノ寵遇
ヲ得ル年アリ情義投合シテ君臣ノ如シ深ク公ノ
不遇ヲ憾ミ具ノ子孫ノ絶滅シ舊祀ノ永熄セン
ヲ嘆キ菅原家ノ一人ヲ得テ之ヲ奉シ誤系統ノ存
續ヲ謀リシニ治定時ニ此ノ地ニアリ慶ヲ聞キ登
京スレバ早クモ公ノ一家ハ或ハ他人ノ保管セラ
レ或ハ輩流セラレテ百年ノ迹見ルベキモ無ク
捉ルベキ所無シ僅ニ第八子慶能ガ知権ナルアリ
テ尋匿セルヲ搜索シ得テ之ヲ携ハ藤原氏ノ聞見

及バガル所ヲ撰ニ北栗田郡芥生ノ里ニ隱匿長養
シ自分ハ公ヨリ得タル書道ヲ以テ寺子屋ナル習
字師モテ生計ヲ立テ居タリ北栗田郡星田村
芥生ノ部参考者表面ハ慶能
ヲ巴トガ子トシ長ズルニ及ニテハ姿ヲモ僧形ト
シテ常ニ慶能法師ト呼ビ世ノ耳目ヲ避ケ父子公
ヲ景慕シ彫造工ヲシテ肖像ニ據リ以テ公ノ生像
ヲ彫刻セシメ奉ジテ以テ朝夕給仕スル當時ニ異
ナラズ公ノ薨後此ノ像ヲ名ヅケ生身ト云フ生前
ノ身ト云フガ如シ公カ密土ノ鬼トナルヲ聞クヤ
二人ノ落膽一方ナラズ天曆九年神殿ヲ此ノ地ニ
營造シ同月七日遷宮式ヲ舉行シ僅ニ悶々ノ情ヲ
遣リ追慕ノ意ヲ表セリ升ハ公ノ寃罪モ雪ガレタ

ルニヨリ公擧スル下ヲ得テ二人ノ愁眉モ幾分カ
展テルヲ得タルナリ祠地ハ菅原氏ノ邸地ニシテ
小麥山ト稱スル所ナルガ小出氏末住スルニ及ビ
築城繩張區域ナルヲ以テ今ノ地ニ移サル小出氏
ノ崇敬淡カラズ増建修築シテ今日ノ如クナリ遂
ニ郡中屈指ノ祠宇トナル小出氏前ニアリテハ足
利氏ノ修繕工事アリシカ天正年間明智氏ノ暴力
ノ及ハガリシニヨリ地方ノ神社伊閤ノ如キ衰運
ヲ免レ以テ今日ニ至ル明治維新以來慶應者年一年
ヨリ多シ其ノ神主トシテ内陣ニ齋キ奉ル所ハ公
ガ小麥山ノ籠ヨリ私市ノ溪ニ朝霧ノ懸レルヲ見
テ口占ミタル歌ニテ

谷鳥の落はさなうら海に似てなみよきうらうらわせの音

ト書カレタルモノト曰フ箱撮ハレバ更ニ箱ヲ作
リ今ハ幾重ノ箱ニナリタルカ古來具ノ内部ヲ窺
ニ見タルモノ無シト云フ留別トシテ賜ハリレ六
首ノ歌ニ首ヲ存ス而シテ原本ハ今亡シ

菅原乃すりおく墨のつらさすりの水乃つきぬさきり
すうらのすりおく墨乃つらさすりの水乃つきぬさきり

此ノ歌ヲ賜ハリシハ延暦元年ニテ公ノ左遷ヲ導
ニ聞キ馳セテ京ニ入りレニ公ノ興ハ既ニ南向ス
ト聞キ追フテ興ニ東寺ニ逢フ護送ノ吏ニ懇請シ
辛フジテ謁見ス源藏ノ精忠ヲ嘉セラレテ家實相
蔭ノ硯ヲ旅囊中ヨリ取出ガサセテ賜ハリ涙ヲ拭フ

テ別レタリトカヤ

生身天満宮ト似タル生毛天満ノ事ヲ附記ス

河内國道明寺ニハ生毛天満宮アリ并ハ公ノ伯
母ナル覺春尼ノ許ハ五ヶ寄ラレ一夜物語リア
リテ曉ル頃ニ暇乞ノ歌ニ 鳴けハこぞこくれ
を以そげ鶴の音乃ぞこぞぬまの境もあなト讀
ミタマヘハ厄ハ名残ヲ惜ミテ何ナリトモカタ
ミノ品ヲト望マレタルニ公ハ持ッ所ノ扇子ヲ
出シ先帝ヨリ賜ハリタル御品ナリトテ其ノ上
ニ自分ノ髪モヲ抜キ添ハ玉ニシレバ厄ハ涙ヲ
流シツ、之ヲ受ケ別レヌ後ニ此ノ髪モヲ神籠
トシテ社ヲ建テ生毛天満宮トハ呼マリ

松蔭硯ノ圖

此ノ名硯ハ北野神社ハ奉納シタリトノ説モアリ
右ノ歌ト共ニ當社ノ神籠ト成レリトモ云フ 吉
親入封ノ際コレヲ改メントシテ開キヒニ一管
々正視ニ得カリレトカヤ手相國清盛ガ趙宋ノ天
子ハ黄金ヲ賄リ以テ求メ得タル所ノモノハ同銘
異石トス當社ノモノト同物視スルハ非ナリ此ノ
形式ノ石硯ハ彼ノ國ニハ往々アリタルナルベシ

源平盛衰
記參考



禁制 丹波國菟部

一 軍勢甲乙人乱妨狼藉ノ事
一 伐採竹木ノ事

右條ノ禁令停止迄若於違犯者
ニ交嚴科者也仍下知事件

永正十三年六月日

右京右大夫源朝直

細川勝元ノ建ツル所腐蝕割截ス

禁制 丹波國菟部村天神社

一 當年軍勢甲乙人乱妨狼藉ノ事
一 伐採竹木ノ社飲ノ事

右條ノ禁令停止迄若於違犯
者者ニ交嚴科者也仍下知事件

天正十三年八月

久左衛門尉 堀

柴田勝家ノ建ツル所

藤原氏謾誣ノ餘波ハ愈嚴シク愈廣ク公ノ一族ハ
固ヨリ門生臣下ニ及ビ治定ハ殊ニ目ヲ注カル、
標的トナリ令ハ身ヲ京都ニ容ル、能ハズ姓ヲ竹
内名ヲ線燕トシ慶能ノ養育ニ具ノ家産ヲ傾ケ奉
所義騰十年一日承平三年六十三歳志ヲ齎シテ園
部ニ歸死ス積善餘慶子孫連縣令ヲ第三十三世兵
太郎實能ニ至リ舊姓武部ニ復シ祠官トシテ其ノ
祠祭ヲ奉テ新カレ由緒ノ古キニモ以テ寶物ノ寥
々タルハ天正ノ兵燹ニ一掃シ去ラレタルニ由ル
維新迄ノ祭禮儀仗

園部藩警固

足尾

大鼓

小頭

長柄 同 同 同

長柄 日 日 日 日 小頭 弓 日 日 荷籠 日 鉢 日

神 釵 鉞 神神神神 御帶 折櫃 日 日 供奉行

出家 若堂 五年 草履取 荷籠 舎人 神馬 昔籠

四神旗 釵 神寶 日 神冠 神寶

太刀 小頭 足足足 神經 神輿 散 鉄箱 五

色絹幣 大鼓 扶扶箱箱 長刀 先先 供供

伴僧 出家別當 駕丁 四人 年持 草履取 扶箱

茶辨當 荷籠 日 日 押押 足足 鞋鞋 騎馬 奉行

名主 町年高 總氏子

園部藩が本社ニ對スル待遇ノ一二ヲ掲ゲシニ此
ノ神社祭禮渡御モ藩ヨリ取行フタカ滋鷓ニテ神
鉢トハ管公ノ詠歌ト枯蔭ノ硯ト言傳ル其外ニ
見松ノ御箱ト唱フルモノアリ之ハ平常領主ノ倉
内ニ收メアリ祭日ノ朝神事奉行之ヲ出シ本社へ
持來ル祠官之ヲ奉シテ神殿ニ納メ而シテ神鉢ヲ

京都府立総合資料館所蔵

出シテ神輿ニ奉ジ御旅所ニ遷行ス神輿ノ御旅所
ニアル内ハ見秘ノ御箱ハ本社ニ奉スルヲテ神
輿ノ還ルヤ又神事奉行ハ祠官ヨリ受取り之ヲ持
歸リテ倉庫ニ納ルモノトス
見秘ノ御箱ノ内ハ見タルモノ無シ傳聞ニヨレバ
小出家ガ嘉府ノ大譴責ヲ受ケ改易ノ刑即チ純家
ニモ至ラントスル時ノ君只管管公ニ祈請シ願意
受納マシマサバ具ノ御禮トシテ本社ヨリ御旅所
ノ渡御ノ式ヲ舉ゲ奉ラントノ意旨ヲ書キタルモ
ノ具ノ箱中ニアルトカヤ
一藩ノ運命ノ繫カル所無難ニ事漸ミタルハ神徳
ノ致ス所トテ藩主ヨリ輕奉ニ至ル迄一藩ノ尊崇

スル所トナリタルナリ故ニ祭禮當日ハ忌服者ヲ
除ク外参拜セザルモノ無ク見秘ノ御箱ニ誓願セ
ザルモノ莫シ且ツ神事奉行ヲ勤ムルハ最上士ノ
任トシテ之ヲ命ゼラルハ幸深トシタルトゾ
上ノ爲ス所ハ下之ヲ習フト云フ時節柄故園部町
氏ノ本社ヲ信仰スルハ當然デアレナレド又ニ一
ニ本源ノアルヲニテ升ハ神徳ノ不可思議ニアル
ナリ往時田中長右衛門ナル惡徒アリ神壇ニ弔ル
レタル銅燈籠ヲ盜ミ之ヲ渡海業ノ船頭ニ賣ラシ
トス渡海ノ船人ハ之ヲ得テ海上無難ノ吉瑞トス
ルヲ以テ高價ニ售ラルニヨルナリ途中迄持来
リタルニ獲ニ臨眠ヲ催シ今ハ寸步モ進ム能ハガ

ルモノカラ横臥シタリ通行ノ役人ニテ見テ雲徒
ヲ呼覺マセ其ノ所爲ヲ聞キ之ヲシテ再曰元ノ如
ク神壇ニ繫ケシメタリ又二石ノ米ヲ盜マレタル
モノアリ一心ニ祈願シタルニヨリ其米其ノ家ノ
前ニ種ニ置カレタリナドノ談許多アリ今ハ畧ス
大刀壹口 是ハ世木ノ関助トモ殿田ノ関助トモ
云フ男ノ用ヒタルモノニテ不思議ナル程ノ大身
ナレバ連々普通人ノ佩ビ得ルモノナラズ関助ハ
園部ノ大男トマデ評ヒラレタル體ナレハ是丈ノ
モノヲ佩ビタリト見エ長サ三尺五寸幅一寸餘如
何ニモ重シ世木村ノ部ヲ参看スベシ寛文二年ニ
幕制トシテ長刀二尺八寸九分以上ノモノヲ佩ガ

ルヲ禁ビリ関助ハ慶安年間ノ人幸ニ此ノ長刀ヲ
帶バルヲ得タリ今其ノ寄附狀ヲ記ス

奉納

丹波國園部神宮寺

天満宮

刀 一腰

嶋田吉祐作
長三尺五寸

山口関助慶政所持

右慶政ナル者ノ出生ハ丹波國船井郡世木莊殿田
村去ル慶安年中十八歳之晩勤大守福源院殿兮廣
政生質太逞相形剛強有高六尺二寸余與其ノ他人
見並行過其半其世以稀也矣太守歆其像賞最深矣
為但勝其他若水治太夫小妾男相勤常同仕猶倚小
魚鯨鯢経華美家々雖瞻望甚禁不許之其頃加藤出

丹守依爲大守近縁強封廣政廢美之餘役家之印以
蛇目紋給廣政惟是生形爲相應之故也至今子々相
傳爲之紋青春院殿靈應院殿相續在士聽其中丹州
往及三十六度雖倍士終不及馬上之後免許有生
國三十三歳以前病卒、素雖微賤之僕因厚恩嚴其
世高貴愁之豈非過令平惠高須可答海味今僕所
奉納之短刀者一年於撰州表小濱氏部少輔召廣政
一日有饗應歸邑之時下賜之敬而終身着帶之及子
々雖交割爲庶君臣未履之惠奉寵 寶履者也矣

昔 享保第八癸卯三月辛日

山口關助廣政嫡男

願主 山口勘左衛門忠廣

塩田山 塩田山塩ヲ産出シタルヲ以テ名ツク
塩田山徳雲寺 小山ニアリ 曹洞宗祖道元和尚
九世ノ法孫希曇和尚ノ開基ナリ和尚ハ薩摩ノ大
名嶋津氏ノ系ニ係ル寺ハ小出氏代々ノ菩提所ト
ス因訃ヨリ此所ニ到ル羊里ニシテ遠ク而モ山中
ニ深匿ス何ヲ若ミテ新ナル僻地ニ菩提所ヲ置キ
且其ノ小藩ノ割合ニ寺院ノ大ナルヤ蓋ソノ故テ
ルナリ因訃ニテ敗レシカ此所ニ遷嬰シテ以テ後
謀ヲナサシムル軍備上ノ設置ナリトテ固ナリ其
ノ二方ヲ拒ゲニ方アヲハ一時ノ維持ハ爲レ得ベ
シ

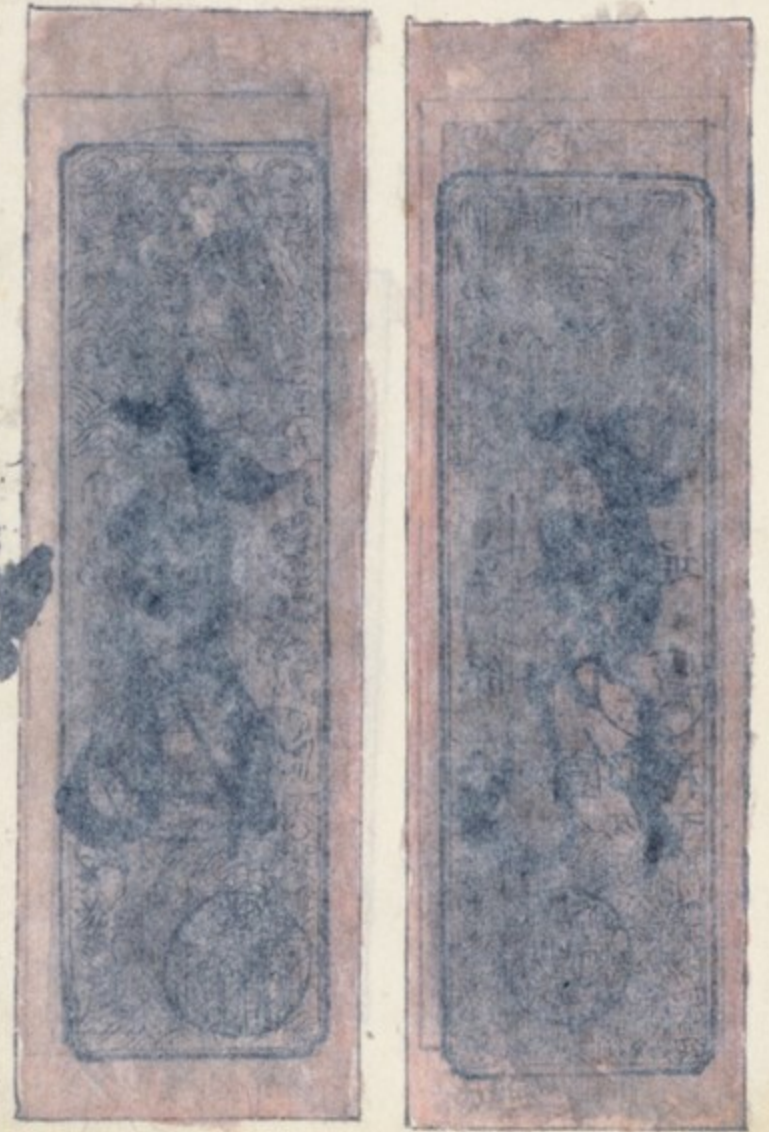
丹波志

新江ノ龍徳寺ト市森ノ玉雲寺ト胡麻ノ龍澤寺ト

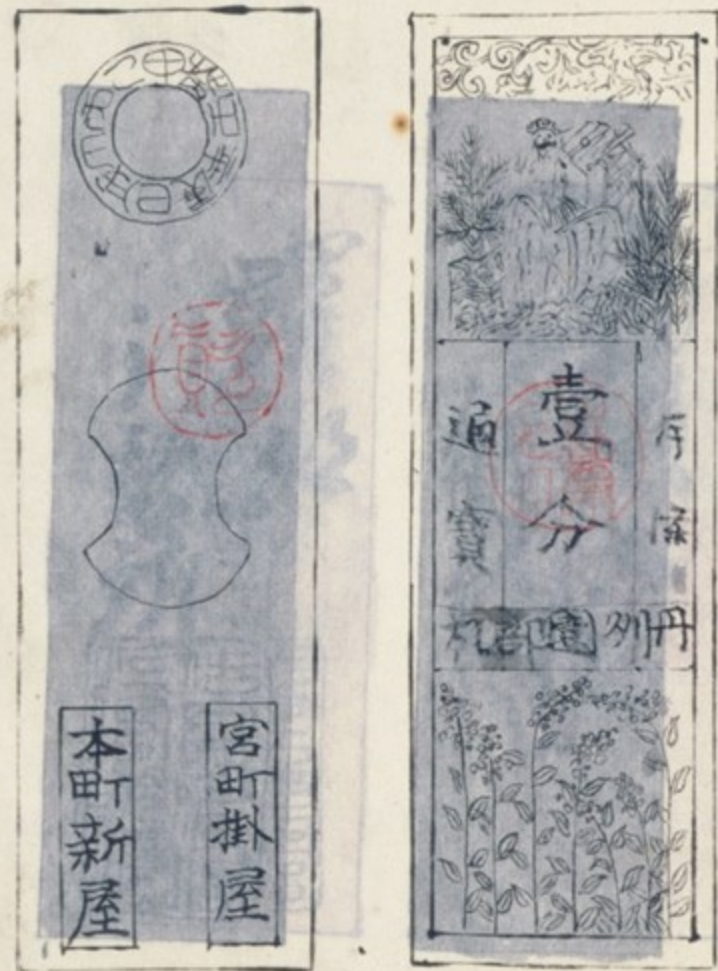
ヲ合稱シテ船井ノ四個本寺トス而シテ此ノ徳雲
寺ハ三十餘個ノ末寺アリ 希曇崇嶼禪師ハ大徳
ナリ

園部公園

公園ハ城跡ニシテ其ノ源ニ沂シハ應仁ノ頃ニ於
テ城郭ノ形ヲ爲シ長左衛門ナル者ノ據有ニ歸シ
細川兵部大輔コレヲ攻メ落トシ長護治部大輔續
ギ住居セリトノ口碑アレド事歴ノ分明ナラザル
惜ムベシ爾後小出吉親封ニ就キ元和五年ヲ以テ
築城シテ住居ス其ノニ家ト爲リ相別カルヲ以
テ祿ノ減スルヲ別項小出家小史ニ記載スル如ク
城至々ルノ資格ナキヲ以テ陣屋ノ稱トシ依然其



京都府立総合資料館所蔵



城至々ルノ寛格十々ヲ以テ陣屋ノ備トシ依然其
 于祿ノ
 築城シ
 借ムベ
 ギ住居
 細川兵
 テ城野
 公園ハ
 園部公
 十リ
 寺ハ三
 ヲ合稱
 三ノ知
 寺ノ本
 寺ノ此
 寺ノ此



京都府立総合資料館所蔵

ラ合稱
 十
 國計
 公
 細川
 十
 持
 十
 藤
 城
 十
 城
 十
 城

ラ合稱
 十
 國計
 公
 細川
 十
 持
 十
 藤
 城
 十
 城
 十
 城

運送所
 浪札部
 分
 右領
 左衛門
 尉
 藤原
 忠
 實

貴公
 本田
 藤
 室
 宮田
 藤
 室

京都府立総合資料館所蔵

菅原光舊庭内
 明治三十年發見
 寶篋塔之類ハル
 云ノニテ近江國三
 井寺ノ同向塔塔
 蓋ト鳳式ノ蓋ナリ
 三井寺ハ明和時
 代ノモノトスル此ノモ
 ノモ明和前後ノ
 モノカ識者云テ塔
 形ハテ其ノ時代
 ナリ物語ルト



船井部上卷
 ソノハ公園ノマヘニ建ル

明
 岐
 志

京都府立総合資料館所蔵

ノ城迹ヲ領有スルトナレリ二百餘星霜ヲ経テ
 國家多事内外ノ兵端屢次蜂起スルヲ以テ一個ノ
 望樓ヲ高所ニ設ケ塔ヲ増シ門ヲ固クシ稍城郭ノ
 形勢ヲ示セシガ維新ニ際シ毀壞セラレテ竹樹草
 菜ノ繁茂スルニ一任シ君侯ノ第臣屬ノ邸遂ニ狐
 兔ノ棲ト爲ル降リテ明治三十九年九月有志家ノ
 發議ニヨリ一部ノ面積壹町四段九畝二十五歩六
 三ノ地ヲ公園トシ近傍ノ民有地ヲ附加シ三十三年
 四月其ノ工ヲ竣リ茲ニ初メテ園部公園ト名ヅ
 ノルニ至レリ然レモ其ノ規模狭小ニシテ外來ノ
 賓客ヲ迎テルニ足ラズ故ヲ以テ更ニ残部ノ官林
 六町壹段六畝十七歩ヲ以テ公園ニ編入スルノ計



畫ヲ爲シ三十六年二月其ノ許可ヲ得タリ而ルニ
 機ノ未熟セザルヲ以テ三十九年マデ遷延シ議ノ
 容レラル、ヤ委員ヲ組成シ工學士武田五一ヲ顧
 問ニ聘シ淺田英夫監督ノ任ニ當リ卒若經營シ漸
 竣工ス巨細細目左ノ如シ
 一公園面積七町六段六畝十二步 但郡有地ヲ除ク
 一道路改修幅四間乃至四尺延長千三百四十間七
 分 一石垣平敷拾四坪壹分 一地均平貳
 千七百四十七坪六合 一壁石立壹千五百九
 十九坪六合 一置土石立壹千七百四十四坪
 八合 一柵工事百九十一坪五合 一排水
 土管延長七十間 一石階幅四間乃至二間延

長二十四間八分五厘 一池中浚渫平五百四
 十六坪五合 一建家五坪 一休憩所三十
 三個所 一櫻楓樹其他植込數十株
 四月廿六日起工十月廿九日竣工 工費金參千
 七百十一圓
 忠魂碑 高二尺一寸 下部六尺角 頭部四尺
 角 臺石垣十四尺角 高五尺五寸 石質丹波産
 花崗類石 工費金壹千八百七十七圓八十六錢九
 厘 三十九年二月十日起工八月十五日竣工

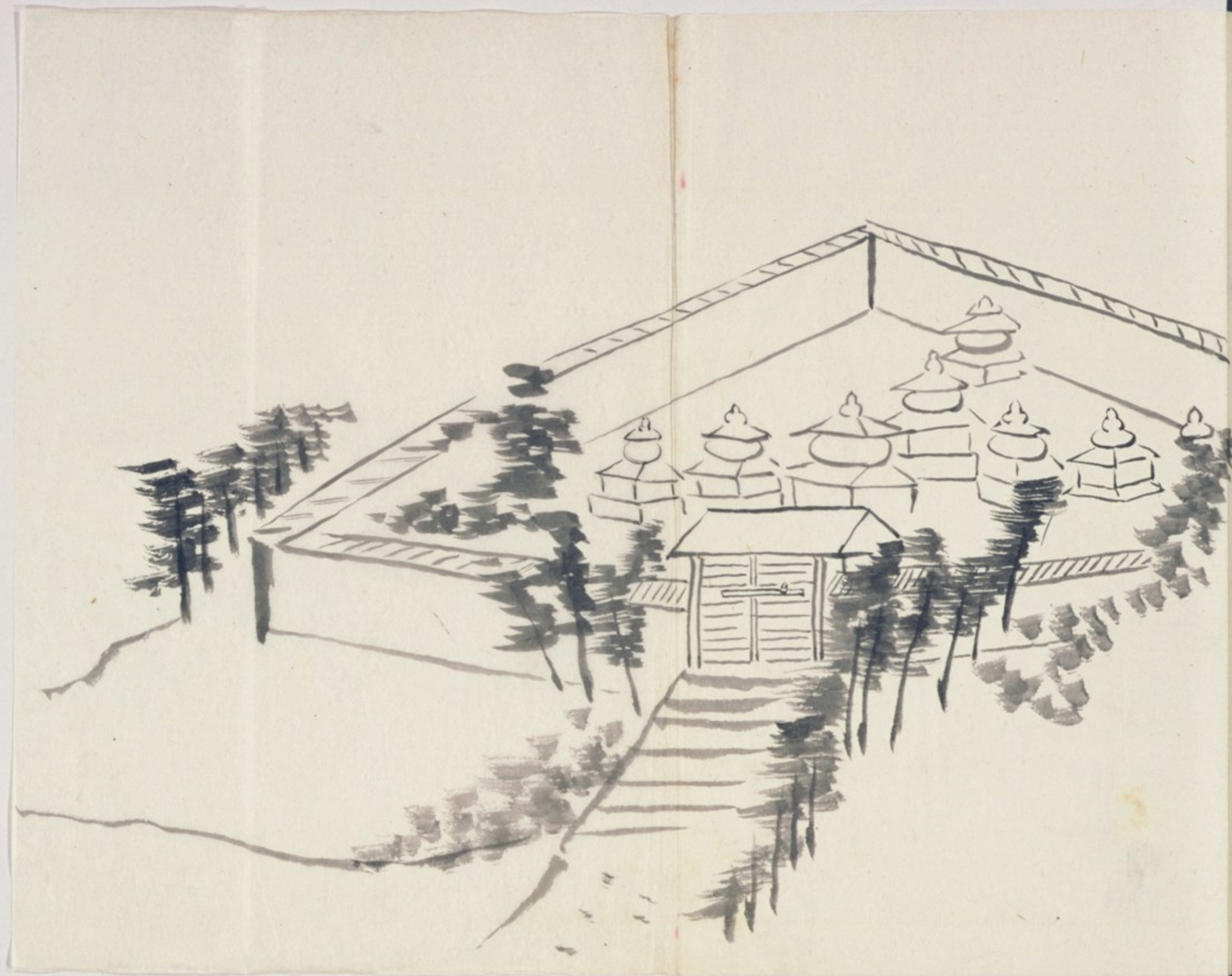


小麦山廟墓地

裏面ニ武名ヲ刻ス



京都府立総合資料館所蔵



小妻山園墓所

東面之方

京都府立総合資料館所蔵

小出山園墓



小出家小史

小出家一名小井氏ハ信濃國ノ地名ヲ家名トス室
 町氏ノ時ニ藤原遠江守爲憲ノ地ヲ領シ其ノ子
 孫ニ五郎左衛門正重アリ尾張國愛知郡中村ニ住
 シ甚左衛門秀政ヲ生ム羽柴秀吉ト聞テ同クシ且
 ヲノ母ハ秀吉妻ノ妹ナルヲ以テ特ニ親ニ善シ秀
 吉ノ起コルヤ之ニ從ヒ東征西戰シテ輔クル所鮮
 カラス具ノ天下ノ主タルニ及ビテ三萬石ノ封地
 ヲ岸和田ニ得テ一城ノ主ト爲ル叙任シテ播磨守
 トナル子四人アリ長子大和守吉政後ニ父ノ官名
 ヲ襲キ播磨守トナル次男遠江守秀家三男大隅守
 三男四男是太郎産堅コレナリ吉政文祿四年ニ但

小出山園墓

馬國出石城主トナリ三萬石^{一ニミ}ヲ賜ハル征韓ノ
役起ユルヤ士卒四百人ヲ率ヒ肥前ニ屯シ御先備
衆トナル秀吉ノ母大政所ノ病ムヤ秀吉ッノ行營
ヨリ奔リ者ス命アリ行營留後トナリ常ニ多ク其
ノ左右ニ侍ス秀吉ノ病ニ危篤ナルニ及ビ秀政ト
片桐且元ヲ臥内ニ召シ秀頼ノ輔弼ヲラシメ遺囑
シテ曰ハク吾ニシテ命ヲ保タバ天下安シ一朝下
世セバ必乱レン朝鮮ト明トニ向フテ交戦スルコ
ト七年吾コレヲ悔エル太甚シ吾死ナバ十萬ノ軍
兵士生還ヲ得ザラン吾カ國ヲ安シスルモノハ徳
川アルノミ吾カ家ヲ永ク保タント欲セバ徳川ニ
及ク勿レ秀頼ヲ輔ケ徳川トノ間ノ調和ヲ保ツハ

一ニ卿等ノカニ倚ラント皆俯伏飲泣シテ命ヲ拜
ス既ニシテ秀吉薨ス素袍五烏帽子ヲ着シ騎馬ニ
テ士卒四百人ヲ隨ハ前驅トナリ會送ス此ノ時ニ
當リ秀政ノ苦衷ヤ如何ニ想察スルニ餘アリ

太閤葬式、時秀政
同勢四百人、之供奉、



太閤在世中特待セラレタル事多ナル中ニ於テ
岸和田城ノ規模ナルニ數層ノ天主閣ヲ築カシ
メタルハ其ノ一ニ居ル慶長中天下ノ大權カ東
移セントスルニ際シ前田利家ハ大阪城ニ居テ細
主秀頼ヲ輔ケ秀政ハ遺言ヲ體シテ大阪關東間ノ
調和ニ力ヲ竭クス時ニ上杉景勝大老職ニ在リ
ナカウ威ヲ東北ニ振ル奥州ニ止マリテ久シク入
觀セズ致迹歴然タリトテ徳川氏之ヲ征ス催促ア
リ秀政老病奔命スルヲ得ズ次男遠江守秀家家兵
ヲ帥ニ東行ス石田治部少輔三成秀頼ノ命ト矯リ
諸大名ノ贊ヲ大阪城ニ收ム小出氏獨コレヲ拒ミ
得ズ小出九鬼蜂須賀生駒真田諸氏東西ノ旗邑ヲ

大阪志

視々父子兄弟叔姪各自ニ背馳シ小出ノ軍ハ東軍
方ナル細川三位恣印ガ籠モレル丹後攻城ニ從事
シ竊ニ關東ニ通シ使者途中西軍ニ見露ハサレ抑
止スル所トナリ且強ヒテ阿環津城ヲ攻メシメテ
ル處ニ東軍ニ疑ハレ解甚カメタルモ具ノ効無
ク新ハ又関ヶ原役ニ於テ金森遠藤ニ氏ノ軍ト共
ニ遊撃隊トシテ南宮山下ニ陣シ南宮西陣ノ押上
ヲ爲シタルニ山上ノ陣ノ効カゲルヲ以テ又爲ス
所無ク漸ニシテ東陣ノ後備中ニ入り大戦ニ加ハ
ルヲ得ズ東軍大捷ノ後觀望ノ罪遣ルニ途無カ
リシカバ秀政憤然トシテ退陣シ岸和田ニ屏居シ
罪ヲ謝シ陳狀太カム徳川氏ノ情狀ヲ容認シ本

領安堵ノ命ヲ下ス世口署リテ武士道ニ恥ツルモ
ノトス一藩ノ人心ハ豈臣民ニ懲々タリ秀政不平
ノ志ヲ齎シツ、慶長九年六十五齡ニテ卒ス法名
本光院殿陽雲日政大居士
大和守吉政續ク播磨守ト稱ス 慶長十九年冬大
阪兵起コル岸和田ハ接戰要地タルヲ以テ大軍ヲ
容ル東將松平伊豆守信吉ノ軍來リ北條出羽守ノ
寺兵未リ加ハリ松平軍出城ス吉政乃チ二子吉英
吉親ヲシテ車軍ニ隨ハシム徳川氏命ジテ淀川ノ
南岸曝布里ノ堤ヲ築キ京都ノ通行ヲ便ニセシム
和成リ兵解ケテ歸邑ス十月八日岸和田ニ卒ス年
四十九 第アリ三平ト云フ

三尹ハ小山大隅守ト稱ス秀政ノ第三子幼名ヲ萬
助ト呼ブ次兄遠江守秀家ノ世嗣トナル慶長七年
叙爵ニ次年養父亡シ遺領ニ千石ヲ分カタル後年
徳川氏ヨリ八千石ヲ加ハラル母ハ関白秀吉ノ正
妻天瑞夫人ノ妹ナリ大政夏陣ニ前將軍ノ近侍
トナリ其ノ側ニ在リ城中火起ルヲ視テ車軍擧リ
テ躍呼シ大將軍父子ノ側来リ賀スルモノヲ以テ
埋ム前將軍侍臣ヲ親ミ三尹ニ謂フ汝コレヲ如何
ニ思フゾ三尹答ラ斂ノ對ハテ如何ニモ笑止ノ
トコソ候フゾ直ナリ此ノ言アル一説ハカニ心諸將且
恥チ且三尹ノ爲ニ危ナム前將軍感動ノ色アリ曰
ハク汝ハ豊臣家ト縁故深キト比類無し今ノ一言

左モアリナントテ慨然タリ太閤恩顧ノ老將舊臣
坐ニ在ツテ顔色無し自今此ノ一言ハ繰リ返サレ
數ノ前將軍ノ口吻ヨリ出デ壯少者ノ訓誡トハ
ナレリ左セル軍功モ無キニ八千石ヲ贏チ得タル
ハ故アルトニ社アルナレ寛永十三年撰ハレテ三
河以東ノ巡見使トナル之ヲ國郡奉行ト稱ス三河
以西ハ市橋下総守長政コレヲ勤ム寛永十九年東
京ニ卒シ子與平次有宗嗣ケ大隅守ト稱ス寛文八
年卒ス子有重嗣ガ亦大隅守ト稱ス元祿六年卒シ
子重興嗣ガ九年卒シ弟重守継ク同年卒シ嗣無ク
シテ家絶ユ
右京大夫吉英ハ吉政ノ第二子嫡出タルヲ以テ嗣

グ但馬出石ニアリシガ第吉親ニ譲リ岸和田ニ入
ル文祿二年齡才ニ七年右京大夫ト稱シ大和守ニ
改ム慶長十九年冬大阪ノ兵起コルヤ岸和田ノ大
坂ニ近キラ以テ招平信吉来リ援ク幾クモナクシ
ラ北條氏重来リ信吉ニ代ハル 吉政命ヲ受ケ暴
布郷壘壩ヲ築キ京師ノ便路ヲ通マ夏ノ役起コル
ヤ金森可重来リ援ク大野道見兵ヲ率ヒ郡邑ヲ掠
奪ス其ノ部下塙直次等浅野長晟ト戦ヒ敗死ス道
見又敗走マ吉英兵ヲ出クシ數十騎ヲ逐捕ス大阪
城陥ルニ及ビ首級百十七ヲ得タリ堺津ヲ警衛ス
從軍シテ敵ノ首級百十七ヲ獻ス大阪亡後出石五
萬石ヲ賜フ時ニ元和五年封ヲ出石ニ移シ家ヲ子

吉重ニ譲リ老ヌ吉重修理亮ト稱シ云孫英友ニ傳
フ英友元祿九年十月三歳夭死シ家絶ノ保科彈正
忠ノ女ヲ娶リテ前將軍ノ女壻トナリ吉重縫殿宮
内主殿ノ四子ヲ生ム寛文六年三月九日八十歳卒
ス修理亮吉重嗣ク七父ノ遺言ニ由リ二弟ニ二十
石ツ、末弟ニ一十石ヲ分與シテ本家四萬五千石
トナル其ノ三男重行英本英信ヲ分家シ新開地五
千石ヲ分ツ是ニ於テ旗下ノ士トナルモ、四家ア
リ而シテ此ノ系統ノ傳ヲ是ニ止メ更ニ園部藩系
統相續ノ分ニ轉ズ
藩祖吉親ハ吉政ノ次男初名助九郎天正十八年庚
寅大阪藩帥ニ生マル慶長三年戊戌父兄ノ薨ト豊

丹波志

臣氏ノ姻戚タルヲ以テ從五位下加賀守ト爲ルハ
年大閏薨ジ大權德川氏ニ歸スルヤ江戸ニ實クリ
徳川ノ世子秀忠命ニテ信濃守ニ改メシム時ニ齡
十四同十年秀忠入朝ノ供奉ス同十五年度成上野
國甘樂郡内ニ於テ二千石ノ邑ヲ賜フ同十八年父
吉政逝去ス吉親ニ出石城ヲ賜フ二代將軍秀忠ノ
御教書左ノ如シ

以但馬國ノ内武第七子七石

十一石餘目添お残し通令

知行不抽子公ニ忠也朱印書判

小出信康子也

十九年甲寅ノ冬大坂舉兵ノ風説早クモ江戸ニ入

ルヤ前將軍ノ命至リ天王寺ニ向ハシノ令シテ曰
ハク京橋口大切堤ノ地理ヲ見テ參レト將軍秀忠
ノ命亦加ハル乃チ急ニ道路分境圖ヲ製作シ之ヲ
上ル攻城方畧ノ畫タリ又岸和田救援隊ヲ出ガシ
翌年五月六日兄吉英ト共ニ進戰シ敵首六十七級
ヲ敵ニ逃七士奉ラ獲タル丁三百有餘中ニ薄田隼
人ノ弟某大野修理ノ族某々アリ元和五年持旨ア
リ園部ノ新賜地ニ入ル吉英ハ出石ニ入ル七年奉
西筑後國主田中筑後守奉レ嗣無ク團除カレ福知
山城主有馬玄蕃頭豊氏移封セラレ久留米ニ赴ク
十命アリ本藩ノ共ヲ以テ福知山城ヲ守ル九年癸
亥ニ代將軍宣下ノ敕命ヲ拜シ上洛スルノ供奉タ

母
城
志

リ對馬守ト改稱セシメラル十年大坂城修繕ノ役
ニ就ク了リテ巡見使ヲ命ゼラル近侍ノ臣十八人
ヲ選ビ幕臣城藏部正能勢小十郎ヲ隨ハ江戸ヲ出
發シ九州二島ヲ渡リ朝鮮琉球ノ境界ニ及ブ翌年
甲戌ノ二月歸府シ繪圖及ビ明細書ヲ製作シ之ヲ
上ル 同年大坂城修繕工事ヲ命ゼラル同十一年
領主移封ノ朱印證ノ下賜アリ 同十四年丁丑十
二月大和國高取城主本多因幡守正武卒シ嗣無キ
ヲ以テ國ヲ除セラル、ニ付キ人数繰出シ該城ヲ
守ル年ヲ越スル丁二度ニ至ル十九年壬午西三十
三國郡代職ヲ命ゼラレ在職十八年萬治三年ニ了
ル 寛永二十年ノ令ニ由リ士卒六十人ヲ出カシ

江戸市廓ノ防火隊ヲ編成ス一萬石三十人ノ割合
ニ由ル正保元年呂川東海寺中ニ一刹ヲ建立シ雲
龍院ト命名シ先考ノ菩提所トス 明暦三年丁酉
正月十八日江戸大風大火ニ付銀百五十貫匁ヲ賜
フ且參觀交代差許ナル 慶安三年京畿洪水アリ
幕命ヲ奉ジ目付役四名江戸ヨリ入京シ工事ヲ起
コスヤ本藩兵ノ監督ニ爲ル 同四年將軍大猷院
ノ日光廟葬儀ニ與ル天使五條大納言ノ饗應ヲ掌
ル寛文元年右京大夫ト改稱ス 二月龜山藩主高
槻藩主ト一番一旬交替ヲ以テ皇城ヲ守護ス時ニ
禁中小火アリ密命ヲ以テ豫防提率セシナリ事無
クシテ了ス 下谷三味線場ニテ邸地ヲ下賜セラ

江戸
城
志

ル其ノ低地ナルヲ以テ人数ヲ出カシ湯島ヨリ土
沙ヲ運搬シ築成シ工事ヲ成ヌ年ヲ越エテ竣ル又
浅草山宿ノ別軒ヲ下賜セラル 此ノ年禁中大ア
リ幕命ヲ奉シテ京ニ入り警衛スニ年將軍新船安
宅ニ試衆ノ扈從ヲ命セラル 三年大猷院十三回
忌辰ニ付キ東叡山ニ献香ス將軍代拜ノ役ナリ前
例毎參觀六月ナルカ多病暑氣ニ耐エザルヲ以テ
出願良訴シ四月トナルト得タリ 寛文四年六
月三日高貳萬六千七百十一石ノ朱印ノ改賜アリ
六年西午丹後宮津城主京極丹後守高國罪ヲ以テ
封ヲ奪ハル 蘇山藩紀事 幕府アリ 松平主殿頭松平若
狭守ト共ニ臨檢レテ城地ヲ歿收ス 同七年致仕

シテ領邑ニ住居シ剃髮シテ意閑ト稱ス八年戊申
三月十一日齡七十九ヲ以テ卒ス 江戸下谷廣徳
寺ニ本葬ノ式ヲ舉ゲ法孫福源院殿松溪玄秀大居
士ニ男ニ女アリ長男吉久改名英知次男直次
一柳美作守直家卒シ嗣子

附言一則 吉親ノ女 重矩ノ妻

板倉内膳正重矩ハ勝童ノ孫ナリ勝童ハ京師所
司代トレテ功績アリ聲聞アリタルハ世ノ知ル
所ナリ
重矩ハ年壯ナルニ及ビ妻ヲ迎ヘシトシテ其ノ
人ヲ選ブ園部城主小出伴勢守吉親ハ家庭ノ教
育ニ心ヲ用エルノ人ナルヲ聞キ且其ノ家眷ガ

田舎育チナルヲ聞キ好耦ナリトシ人シラ之ヲ
聘セシム吉親モ亦佳智ヲ獲ルヲ欣シ談速ニ成
リ事早ク遂ゲ伉儷比無シ童矩夫人ヲ愛敬シテ
側室ヲ置カズ夫人屢々コレヲ勸メ美姬ヲ容
ル、モ顧ミズ夫人一日從容曰ハク諸家ニ側室
無キハ無シ此ノ如クシバ世人妻ヲ以テ嫉妬ト
シテ笑罵セン是非ニ妾ヲ憫ミ妾ノ爲ニ之ヲ納
レ玉ヘト愛使スル所ノ一女子ヲ進ム女子名ハ
直。本村木所ノ木屋藤兵衛ノ子。童矩其ノ切
ナル言ニ從ヒ妾トシタリ。童矩一日久世大和
守ヲ訪フテ和蘭製ノ時晷ヲ視ル時至レハ一童
頭シ鐘ヲ打チ之ヲ報ス童矩コレヲ奇トシ歸リ

テ夫人ト直トニ之ヲ話シテ美色アリ。童矩ノ
童職ニ就クヤ伴違騷動起コル其ノ童巨原田甲
斐賄賂ヲ諸執政家ニ行フ而シテ童矩ノ勁直ヲ
憚リ其ノ路ヲ求ムルニ苦ム妾直ノ父ヲ探リ出
カシ直ニ謀ラシム藤兵衛奇貨置クベシト數々
直ニ會ヒテ主公適意ノ物件ヲ問フニ平素嗜好
スル所無キヲ如何ニセシ。直偶爾彼ノ時晷ヲ
憶ヒアレナラバ主君モ愛受シ玉ハシト云フ
藤兵衛喜シデ仙臺郎ニ赴キ之ヲ告グ。原田甲
斐コレニ賞賜シ奔テ大老酒井雅樂頭ニ賄ヒ時
計師數名ヲシテ久世郎ニ到ラシメ和蘭時晷ヲ
分解檢定セシメ類似品ヲ製造スルヲ得タリ

丹波
志

直矩一日家ニ歸ル聞キ憤レ又時鐘ノ鳴ルアリ
麻間ヲ顧ルニ前年一見ニタルモノニ似タリ大
ニ驚キ之ヲ侍臣ニ告ス侍臣直女ノ置ク所ト
答テ直矩直ニ奥ニ入り勸聲直ヲ呼ビ之ヲ問
フ對ヘテ云フ所仙臺ノ原田ヨリ父共衛ヲ
シテ贈ラシメタルモノ云々直矩大聲曰ハク
直ニハ今ヨリ暇ヲ遣ハス其ノ時計ハ汝負ッテ
出テヨ自後復々妾ヲ野ハス伉儷愈々厚シ
寛文八年直矩免職所司代ニ貶セラル大老酒井
雅樂頭ノ謀ル所水戸光圀コレヲ聞キ同十年
復職ノ請乞アリ同十二月五日ヨリ寛文十年三
月十二日ニ至リ事件落着其ノ時直矩ハ甲斐ガ

眼罪セガルヲ怒リ我ハ板倉内膳ナルヲ具ノ方
志レハスマイトノ一言ニテ甲斐ハ依頭シテ舉
ケル能ハガリシトゾ
無キヲ以テ生前ノ契約ニテモ有リシニヤ吉親ノ
願ニテ直次ヲシテ直家ノ遺女ニ配レソノ家ヲ續
ガシメント爲セシカド報文ノ進達前ニ直家ノ死
ニ逢ニ家断工後ニ其ノ願意達スルヲ得テ直次ハ
一柳宇右衛門トナル所領三ヶ一ヲ減セラレニ萬
石トナレリ
信濃守英知初名ハ宇兵衛改メテ勳兵衛相續
シテ吉久改メテ英知兄弟姉妹合セテ十四名アリ
元和四年戊午江戸邸ニ生マレ寛文七年丁未六月

甲斐志

九日家ヲ嗣キ十二月廿六日從五位下信濃守叙位
任官ノ下アリ同九年己酉六月廿九日幕命ニ由リ
京都北野天滿宮ヲ修治ス正保九年郡代公事沙汰
役ヲ命セテ西國方面ノ公事ニ預ル十六年間在
任ス慶安三年畿内洪水アリ具ノ巡見使トナル同
四年三代將軍ヲ日光山ニ葬ルニ付キ具ノ勤役ニ
赴ク延寶元年癸丑十月廿七日致仕別髪ニ常慶ト
號ス時ニ五十六歳同十一月十二日長谷部國直在
銘ノ短刀一口ヲ獻ス時價三百貫文ト云フ延寶六
年戊午東福門院御喪中幕命ヲ奉シ泉涌寺警衛ト
其ノ防火隊ヲ出ス慶安四年辛卯六月五日卒ス
牛込寶泉寺ニ葬ル法隆漢光院殿月窓了心大居士

ト追辨ス

伴勢守英利 初名大學 實名吉尚又英法後ニ英
利ニ改ム 寛文八年戊申七月朔日始朝見ス將軍
家綱ニ謁ス 同十一月登營シテ太刀一腰馬代金
壹百兩時服六領ヲ獻シ家督相續ノ謝恩トス 同
八年庚申六月宮津城主永井信濃守横死シ國除カ
ル 同月晦日其ノ本丸ヲ收メ之ヲ守ル翌年四月
撤兵歸邑ス 寶永二年乙酉致仕隱居別髪ニ正徳
三年癸巳二月十七日江戸ニ卒ス齡五十五下谷廣
徳寺ニ葬ル法名ヲ靈應院殿瑞峰義光大居士トス
生前京都防火隊隊草見付門修築等ノ下ヲ擔任ス
信濃守英貞 貞享元年甲子二月十六日國部ニ生

信濃守英貞 貞享元年甲子二月十六日國部ニ生

丁卯奉行者萬石
以上高持大名
四人

マ元祿十年丁丑閏二月朔日登城シ將軍綱吉ニ
謁見シ造太刀一腰馬代銀一枚時服三領ヲ獻ス時
ニ年十四 寶永二年乙酉四月廿二日相續許可セ
八日謝恩登城造太刀一腰馬代黄金百兩時服六領
ヲ獻ス 從五位下信濃守叙任 正徳元年辛卯幕
命ニテ上京ス防火隊出役ノ命ヲ承ケ京師ニ駐屯
ス 享保元年又同命ヲ承ケ 爾後連年消火隊ヲ
京任セシム 十年乙丑五月奏者番寺社奉行ニ役
兼務ノ命ヲ承ケ 十五年將軍日光廟代拜ノ任アリ
三月朔日若年宮トナリ太子ノ傳ヲ兼メ 元文四
年巳未八月十六日將軍吉宗ノ自畫ヲ下賜セラレ

十月十一日將軍家重
新ニ三子萬石以上ノ
判物朱印ノ賜ヲ御
朱印改トス

特恩ナリ圖ハ野助 延享元年甲子十一月十九日
江戸邸ニ卒ス享年六十一 下谷廣徳寺ニ葬ル 法名
恭雲院殿一叟紹貫大居士
信濃守英持 先君ノ子延享三年十二月寺社奉行
トナル 從五位信濃守享年六十二卒ス(初名登城
以下紀重關畧) 後日ヲ待ツヲ補フベシ
伴勢守英常 初名真三郎 寛保三年癸亥二月十
二日江戸邸ニ生マル寶曆五年四月十五日登城將
軍家重ニ謁見シ進物謝恩例ノ如シ太子謁見亦同
ニ同七年十二月八日任叙先代ノ如シ時ニ年十五
從前登營柝ノ間ナルヲ菊ノ間詰トナル 明和四
年丁亥家督相續入朝造太刀馬代金貳拾兩鈔綾五

御
殿
志

卷ヲ奉ル 六年奏者番トナル 七年入國ニ付キ
 途中伊勢參宮出願ニテ許可ヲ得タリ 安永四年
 日光山祭禮奉行タリ 同年九月廿日奉去享年三
 十三廣德寺先茔ニ葬ル 法諡靈源院殿猷峯紹機大
 居士
 信濃守英筠 初名主稅 安永三年甲午十二月江
 戶ニ生ル 四年十一月廿四日相續對馬守從五位
 下任叙十二月朔日一柳末榮名代入朝謝恩猷品ス
 對馬守ノ幼ナルヲ以テナリ 信濃守ニ改ム 七
 年江戶本所倉庫防火隊ヲ出カス 天明元年ニ終ル
 天明六年櫻田組方角防火ヲ命ゼラル 同六月廿三
 日免ビラル 寛政二年二月十五日初登城謁見猷

岳例ノ如シ時ニ年十七 同四年四月初歸邑 十
 月天使饗應ノ下ヲ江戸管中ニ勤ム 同十月五日
 京都北野天滿宮造營ニ從事ス 幕命ニ由ル 文化
 十二年日光山祭典東照宮ニ百回忌辰ノ天使饗應
 豫備ノ命ヲ承ク 文政四辛未年五月四日領邑郡
 館ニ卒ス 享年四十八 園部廟地ニ葬ル 法名泰盛院
 殿雄道榮嶽大居士 六月碑ヲ廣德寺ニ建ツ
 信濃守英發 文化七庚午六月江戸ニ生マル 文政
 四年七月十六日相續朝見猷岳例ノ如シ 六年四
 月三日日本所倉庫防火隊ヲ命ゼラル 八年十二月ニ
 了ル 同十二月天使饗應ノ命ヲ受ク
 英敷 大村丹後守訖頭ノ子 養子相續 傳久ク

丹波志

英尚 初名主稅 安政三辰年三月相續 文久四
子二月十五日主稅ヲ仔勢守トシ諸大夫被仰付
元治元年六月廿三日京都ノ形勢容易ナラザル旨
周旋方ヨリモ留守居ヨリモ報告アリ 同日ヨリ
家老物頭以下惣詰家形ニ於テ會議開カレ各自見
込ヲ演アバク旨家老ヨリ口達ス 夜ニ入り會議
終ル明日辨曉井口紀太夫ヲ問使トシテ京阪ニ出
張テシム頃路龜山藩情ヲ伺ハシメ在京諸藩ノ動
靜ヲ伺ヒ都度々々報告セシメ京阪出張ノ藩兵ヲ
督察シ内命ヲ其ノ隊長ニ齎ス 同廿四日 井上
紀太夫ニ足輕七名ヲ附屬セシメ奈途セシム足輕
ハ極強ノモノヲ撰ニ報告アル毎ニ急駛歸國セシ

ムルノ用ニ供スルナリ
同日京都詰ノ書役森田直次ヨリ急使ノ足輕息キ
レ 參着ス申刻頃ナリ途中ニテ井上紀太夫ニ
行逢ヒ備ニ京都ノ動靜ヲ叙バタリ急使ノ言ニ曰
ハク前日采厄ヶ崎及ビ大阪等ヨリ長州勢入込マ
ントスル様子ニテ伏見京都次第ニ動搖ス 諸藩
在京ノ兵勢揃スルモノ許多ナリト問モ無ク在京
ノ徒士目附田井昌平ヨリ書面着コレ亦同様京都
ノ情況ヲ報ジ御所九門メ切詰大名ノ兵追々繰出
サントシテ一橋殿會津殿ノ命令ヲ待ツ等ノ文ナ
リ 家老長瀬久左衛門出陣ノ用意ヲ爲シ終夜門
ヲ開キ火ヲ點ジ報告ヲ待ツ一營隊物頭以下相集

マリ甲冑馬匹旗幟大鼓貝具ノ他順ヲ追フテ排列
ス兵卒ニハ号令次第長瀬師ニ寄合フベク令ス
藩中一同ノ社参併参ノ外々出ス可ラズトノ命出
デ一著人氣ヲカフ
同廿七日 前日ヨリ表役會議晝夜コレアリ 郡
奉行ヨリ領内村々ニ布告コレアリ獵師ヲ召集
鳥獸ノ威シ簡タリトモ所持ノモノハ玉薬トモ持
参シ御時節柄御加勢申レ上ケベク旨達ス 又村
々郷士ノ内御用ニ立ツベキモノヲ募ル 小山口
木崎口等足輕張番ノ地ハ人増アリ
同廿八日村々ノ獵師及ビ小銃所持ノ者集合シ夕
ルモノ二百二十三名 郡奉行ヨリ命令シ心得ヲ

モ申聞カセ人名ヲ籍記シ出張スバキ箇所ヲ示シ
他ハ門番ニ充ツ 天満官祠官武部左衛門ハ擊劔
ノ聞工アリ石出サレ師範役並トシ中軍ニ加フ以
下郷士追々召出サレ中軍ニ編入セラル 岨岨米
藏詰役人ヨリ足輕使来ル長州軍勢伏見長州屋敷
ニ居タルモノニ手ニ分カレ一手ハ山崎ニ集シ
一手ハ岨岨へ来リ天誌寺ヲ以テ宿陣トシ何レモ
軍陣行装ナレバ如何体ノ義ニ立至ルモ計リ難シ
モシモ兵糧ノ無心申来ラバ如何取計ハントノ伺
書ヲ持歸ル 會議アリ書状ニテ返事アリ此ノ時
圍米數百俵岨岨ノ米廩ニアリテ役人ニ名之ヲ掌
ル家老ノ命令次第ニテ諸方ハ運送スルヲナルヲ

岨岨志

以テ平常々雇舟車アルヲ幸ニ京都郎其他へ至急
運送セシノ天龍寺燒去ノ際ニハ心配ナカリキ
浪人共慶々ニ起ルノ風聞アリハ木村埴生村番所
人数増アリ前ノ雇入ヲ以テ充テラレタリ
同廿九日京都所司代ヨリ達書一通京都留守居へ
下ル長州藩士敷許ヲモ得ズシヲ押テノ上京アル
趣ニ付山陰道筋播州路等無油断見張り通行スル
者之アテバ之ヲ留置キ相伺ヒ所司代差圖ノ上通
行可致若シ多人数通行スルニ於テハ上京スルニ
限ラズ之ヲ留置キ所司代へ可相伺旨ナリ 番所
々々ハ石ノ旨急報ニ強談スルモノアラバ急度處
分スバヤ旨申運ス 町々自身番始マル 兵糧方

御臺所へ詰切諸番所其他へ運送ス 出張所迄々
自吹トナル

七月三日 八木村出張ノ者歸ル但自身番ハ具儘
トス木崎口モ郷組一人元ノ張番トナル此ノ表ニ
ハ差シタルヲ無キ故ナリ 併シ是ハ丹波表ノ下
ニテ大阪表ヨリ伏見山崎岨岨ハ殺氣充滿シタリ
同五日 岨岨米倉出張役谷口次郎大夫歸園シ京
都ニテ探索シタル事情ヲ口述ス 長州ヨリノ申
立ノ趣旨大様ヲモ知ルヲ得諸藩周旋方ノ方向モ
知レタリ 京都郎在勤書役兼賄方杉森要六歸園
ニ留守居ノ傳言アリ途中ノ災難ヲ恐レ書面ニハ
秘密ノ下ヲ記セズ 傳言ノ趣旨ハ京都ノ形勢日

京都府立総合資料館所蔵

ニ、切迫シ今ハ一方ニ長共ト一方ニハ會津衆
名ノ兵ト、睨合ニテ喜ラバ切ラシノ勢ナリ故ヲ
以テ近江ノ諸大名ヲ初筆トシテ近國ノ諸侯御自
身采帶ヲ執ツテ禁闕ヲ御守衛ナサレ孰レモ一橋
殿ノ下知ヲ受ケ出頭アリ本藩ニ於テモ御直勤可
然トノコトニテ一同愕然タリ然レドモ君侯ニ御勅メ
申ス族モアラザリシカ京都傳奏公卿ト一橋會衆
等ハ御不例御申立ニテ御上京ハ沙汰止ニトナレ
リ會衆トハ會津藩主祐平肥後守衆名藩主祐平越
中守ニテ一ハ京都守護職一ハ京都所司代ニテ其
ノ實兄弟ノ間柄共ニ佐幕ノ巨魁トハ聞エシ
同六日 家老長瀬久左衛門御名代上京首途馬廻

リノ士二十名(以下ノ者モ加ハル)足輕三十人隨行
ス長瀬ハ騎馬以下弓矢銃槍携帶孰レモ家ニテ水
盃ノ式ヲ行ハリト云フ 兼而呼寄セテ爾獵師ニ
酒料ヲ與ヘテ勞ヲ慰メ且鉛半斤元ヲ與ヘ一刀佩
用ノ許可ヲ下ス
同七日 京都留守居ヨリ急使ヲ以テ言上スル趣
ハ是非共殿様御上京アリテ天機伺アル可シ御大
名方已ニ御上京相成ル分十八藩ニ及ビ其他追々
御上京アリ一橋公會衆西侯トモ御所ノ内ナル疑
花洞御滞在等ノ下迄モ逐一申立ラタリ長瀬久左
衛門ノ一隊ハ之ニ半途ニ出逢ヒ然ラバ君侯ノ御
出馬ヲ勅メシト引返ス隊中ニ知ラザルモノハ

丹波志

驚キ異シニ藩中ハ人氣空シク婦女子等ハ水盃シテ出タル夫ヤ兄弟親子ノ一日ナラザルニ歸リ来ルヲ喜ブナド何か何ヤラ判ラヌトノニ多カリシ早チ一人城門(城ノキタル鉄門アリ)ヲ乘リ出テ夕リ升ハ所司代ノ伺ニテ伊勢守自身出馬可致哉將又家来上京セシム可キ哉ト云フ安閑ナ書面ヲ携ハタル使者ニテアリキ其ノ儀ニ及バズトノ返答ナラント思ヒテ外口答ニテ主人早速上京セヨトノナリ會議ニ會議ヲ重ネレガ君侯ハ到底上京ニ耐エヌトノテ俄ニ中暑平臥申立テト相成リ家老名代上京ニ決ス是ガ十年前ナラハ閣老ノ命ヤ所司代ノ令ヲ背リトナド思ヒモ寄ラ

ス所ナレド近來幕威衰ハ諸藩其ノ命令ニ服従セザルナド大抵斯ノ如クアリシ
同八日 穢師及手銃所持ニテ集會セシモノ二百餘人ヲ折半シ半数ヲ園部ニ止メテ半数ハ歸村セシム且後日交代スベク其ノ期ヲ令ス
同九日 長瀬久左衛門上京ノ首途ス行列往者前日ノ如シ之ヲ一番隊ト稱ス
同十三日 當地平穩ナルヲ以テ穢師及手銃所持ノ者ヲ歸村セシム是ハ右等ノモノ日夜處下事無ク只ブラ一町中ヲ徘徊シ動スレバ浪費不身持ノトアリ却テ領民ノ迷惑トナル故トテ嵯峨置場目付谷章六ヨリ書面到來但足輕使ツノ趣ハ

母
城
志

長州勢當所へ集合シ天龍寺ヲ本陣トシ今ニモ幕
府方ト對陣アラントノ勢ニテ近傍人民ハ荷物ヲ
運ビ散乱スルノ有様ナレバ出張所手薄ニテ守衛
スルヲ難キニヨリ其ノ方途ヲセヨトノ意ナリ堤
城置揚出張ハ當藩ノ米穀ヲノ他船運ニ付キ必妥
ノ所ナレバ之ヲ廢スルヲ難ク左リトテ之ニ供ス
ルノ兵備モナケレバ百目筒一挺ニ藩ノ印半纏込
被着用ノ小者三十人ヲ仕立テ之ヲ送ル當時藩士
ノ家ニ居ル次男三男等孰レモ召出し使用シタル
ニ猶人數ノ不足ニテ斯ノ如キ外面ヲ装フノ姑息
手段ヲ謹セリ

十七日 長州藩士入江九一漢志太郎ノ名ヲ以テ

十四藩へ廻送シタルノ書面寫一通京都ノ留守居
周旋方ヨリ来ル其ノ文意ニ曰ハク主人毛利大膳
大夫が國家ノ爲ニ盡シタル至情ヲ察シ又脱走
七卿ノ三條中納言始ノ救助ノ罪ヲモ免トシメ
ガ爲ニ朝廷ニ向テテ許願セントノ上京ナレバ同
情ヲ寄セラレシテ望ム等ノ事ヲ細々述ベタル
者ナリ 此ノ書面ニ接シテヨリ従来西端ヲ持シ
タリシ藩情モ爲ノニ一變セントス 書役平名常
次密旨ヲ帯ビテ上京レ之ヲ長瀬久左衛門ニ達ス
藩情一變ノ變トカヤ 長瀬ノ率フル一藩隊ハ所
司代ノ達シニヨリ伏見豊後橋ニ出陣ス名ハ長州
兵ノ入京ヲ防禦スルニアルナリ

長州藩士入江九一漢志太郎ノ名ヲ以テ

同十八日 山内孫右衛門藩中ノ次男三男以下父
兄ノ家ニアルモノヲ率ヒ二番隊分隊トシテ出張
ス士分ニテ四名以下ニテ三名ヲ得テ之ニ槍持三
名大筒一挺彈藥一荷ヲ添ヘタリ
同十九日 荒木善右衛門伏見ヨリ馳歸リ長州勢
九ノ三百人伏見屋敷ヨリ繰出シタリ其ノ行ク先
ハ不分明ナルモ京都ヘ向フナリト之ニ添ヘタル
長瀬久左衛門ノ見込書アリタレド書中ノ意味漏
レズ 早打入ル京都留守居大崎奥右衛門ノ報知
ナリ 長州勢禁闕ニ向フテ砲砲ヒタルニ付キテ
ハ長州勢ト見ハ早速可討取旨幕府大目付ヨリノ
達ナリ云々 因テ又獵師等召集ノケルガ差ヒタ

ル慶化モ出来ラザルヨリ歸村セシム長州勢敗北
後諸午出張ノ者漸次引上ゲトナリ園部ハ以前ト
替ラズ人氣靜ナリ

小出秀政

播磨守
岸和田城主

吉政

播磨守

吉英

右京大夫大和守
出石城主

吉親

伊勢守

英知

初名吉久
信濃守

秀家
遠江守

三尹
大隅守

重堅
基太郎

直次

一柳守右衛門
一柳美作守直家養子

女子
板倉内膳正直矩室

女子
一柳藏人直賴室

英利

伊勢守

英貞

信濃守
從五位

英沼
主殿

女子
英持

信濃守
從五位

政之助
早世

半之丞
早世

英常

伊勢守

英篤

信濃守

英信
晴之進

女子
小出外記養子

英發

播磨守

祐英

永三進
同姓作十郎英清養子

女子

稲垣對馬守長則室

英教

信濃守

女子

實大村丹後守純顯女
公御坊城家嫁

女子

藪増次郎室

女子

松平大炊頭頼徳室

英尚

主税

英延

浅井琳菴名ハ産遠通稱萬右衛門近江ノ人山崎閣
齋ノ門人聘セラレ哲學トナル義解説武要鈔ノ著
アリ

劉石秋名ハ齋字ハ若鳳通稱三吉豊後日出ノ人家
釀酒ヲ業トス少學ニ志シ廣瀬淡窓ノ門ニ入り
朱子學ニ深達ナリ詩作ニ工ニシテ同門十哲ノ一
ニ授マル京ニ出デ、私塾ヲ一條烏丸ニ設ケ子第
ヲ引ク文久三年江州西大路藩ニ聘セラレ文久三
年京都學習院ニ教授ス慶應二年本藩ノ聘ニ應シ
テ移居シ明治二年五月廿九日年七十四ニシテ没
ス子冷窓嗣ヤ亦西大路藩校ト本藩トニ教授ス早
ク没ス

役名並二身分

家老	羊寄	側用人	旗奉行	物頭	長柄奉行
近習番頭	元締	徒士頭	郡奉行	勘定奉行	
大目付	町奉行	京都留守居	馬廻	近習	
部屋	次詰	醫師	給人格中	小姓	代官
小姓	徒士目付	茶道	小僧	徒士格	役人
士	隱居	次物書	賄	料理人	膳家具役
主	下臺所賄	廣敷賄	在所留守	残	物方
着到方	組頭	武器方	下役	山方	下役
役	銀札	堀足	輕目付	京置場	足輕
持筋組	先弓組	明	組	鉸前番	下坐
輕	手大工	板屋	根方	數寄屋	預
					庭方
					部

屋使番	瓦屋根方	鐘門番	中番	北門番	南
門番	木崎口門番	小山口門番	納戸藏番	池	
測番	町同心	代官	手代	旗小頭	長柄小頭
中間小頭	長柄中間	山方	中間	杵	藏米斗
會所小使	手大工	板屋	根葺	瓦師	廣敷鉸前
番	廣間中間	廣敷裏門番	菜園	者	露次番
中嶋藏番	下屋敷	門番	廣敷水汲	使番	下屋
敷小者	水主	徒部屋	小者	小役人	部屋小者
足輕部屋	小者	長柄部屋	小者	西門	下男
小使	看到附	拵方	山廻	武器方	下役
札場足輕	目付	代官	手代	下臺所	鉸焚
番	會所番	九官	南門	鍵番	銀見
					多葉粉
					置

町
藏
志

場下目付 留守居出役

右ノ内部屋トハ女房女儀ノ意ニテ奥方掛リノ

ト 部屋使番亦同シ

廣敷トハ奥方ノ玄關 廣敷錠前番 廣敷裏門

番等準ズ

下座見トハ諸人ガ尊敬スル處ニ地上ニ坐シ拜

禮スベキ人ヲ見分ケル役 門番所ニ居ル中間

小者等ハ足輕以下ノ者ニテ腰ニ一小刀ヲ帶ブ

ル者 最下等ノモノ

右ハ在所役名ニテ江戸役人ノ分ハ畧ス 道中役

人亦同シ

領主ヨリ藩中ノ者ハ下賜サル・分限ヲ祿制上三

等トス曰ハク知行曰ハク切米曰ハク扶持以テ其

ノ家資ノ高下ヲ判ス家老ノ家ヤ番頭ノ家ハ知行

級中ニ在リ奉行留守居ナドノ役ヲ勤ムル家ハ切

米ノ格トシ下役小頭等ハ扶持方役人トス中間小

者ノ類ハ等外ナリ

公役雜纂

公役徵發ハ幕府ノ命令ニテ諸藩邸番コレヲ勤

ム閣老諸藩ノ取カラテ計リテ相應ノ事ヲ命ズ大

藩ニハ大事ヲ小藩ニハ小事ヲ煩簡具ノ宜シキ

ヲ得シム

豊臣氏ノ制ハ壹萬石四十人ノ割 徳川氏ノ制

ハ壹萬石ニ對スル軍役ニ及筒十及筒銃合セテ

二十挺弓十張鎗五十筋上士ノ持槍ヲ馬止十四人旗
三旒 改正元和二年ノ制騎士三十五人銃八十
口弓二十張槍七十筋旗五旒

慶長十九年大坂冬陣吉親ヨリ壹百人吉英ヨリ二
百人

元和十年大坂城普請手傳 本丸西方石垣貳個所

内一ヶ所二間
一ヶ所一間四尺五寸三分 同堀縁 西北ノ角垣七間一尺五
寸 同山里九二十五間三尺 寛永二年竣工

寛永元年大坂城本丸土堀十三間五尺八寸二分修
築 年内竣工

同五年大坂城二丸南面三十七間四尺二分ノ土功
同本丸十間六尺四寸ノ土功 江戸城石垣普請

領地一萬石ニ幅三間ノ土功ヲ以テ表準トシ石垣
坪割七十七坪五合三厘ヲ標準トス當藩ハ臣下百
石高ニ付一人半ヲ出カサシメ銀納ナレバ一人ヲ
二百八十九匁二分三厘トシ内五十八用捨セラレ
藩費支辨ス人夫出役スルモノハ出役中扶持米ヲ
給與シ小屋ヲ供ス 江戸廻シ角石三十八本ヲ大
阪ニテ購入ス具ノ價銀貳拾五貫〇五十六匁一分
ナリ諸藩競フテ工事ヲ就ス時日ヲ惜マズ手間ヲ
吝マズ數月ニシテ竣ハル謂ハ所ル大名普請ニテ
堅牢無比ナリシトゾ
寛文八年ヨリ同十年ニ及ブ北野天満宮普請手傳
ニハ九名ノ奉行ヲ出張セシム普請入費ハ幕府ノ

夏擔タリ

檢地役人出張ノ事 延寶五年將軍家直轄地謂ハ
所ル天領ノ上方ニアルモノ、檢定アリ其ノ荒地
多キヲ以テ團々ノ諸藩ヲシテ之レニ從事セシメ
丹波ニアルモノハ當藩ニ從事セシム其ノ法タル
ヤ量臣氏所用ノ竿ハ六尺三寸ナルヲ今曰改メ六
尺〇一步トシニ分九厘ノ縮地トナリ増稅トナル
先ツ村々ヨリ割地引案内帳ヲ差シ出サシメ一筆
限リニ番附ヲ肩書ニシ一枚毎ニ札ヲ立テ番附ニ
從ヒ檢査スルモノトス 檢地役人一名 手代一
名 下役一名 草取一名 間數呼一名 呼次二
名 案内者一名トス

小出大隅守三尹御國廻り役トナル 寛永十三年
正月天下諸道巡見使出張ノ事アリ三河國以東ヲ
三尹ニ以西ヲ市橋下總守長政ニ命ゼラル 將軍
代替ハリアルバ此ノ事アリ王朝ノ諸道巡察使ノ
如ク人民ノ利弊苦樂ノ情况ヲ將軍ニ報告スルナ
リ 嘉永安政以後國家多事此ノ事止ム
寛永十四年十月嶋原峰起ニ付征伐加勢トシテ七
騎士ヲ出カス謂ハ所ル天草騷動ニテ切支丹宗徒
ノ叛逆ニテ閣老板倉内膳正ノ催促ニ係カル肥前
國ニ起コレル一揆ニテ丹波ノ諸藩ニマテ及グ其
ノ事ノ容易ナクガリシテ知ル
同十五年高取城本丸在番 是ハ大和國高取城主

丹波志

本多因幡守死シ家系無ク養子無キヲ以テ断絶シ
 城地ヲ没收セラレタルニ由リ守護トシテノ在城
 ナリニノ九ハ栗山修理亮在番シ目附役トシテ堀
 三右衛門江戸ヨリ下向スニケ年ニシテ城主定マ
 ルヲ以テ歸國スソノ軍役左ノ如シ
 一番隊銃卒五十人 二番隊銃卒三十人 三番
 隊弓手二十人 四番隊長柄鎧五十人 五番隊
 弓手五十人 六番隊弓手三十人 七番隊鎧二
 十人 甲冑三荷 羽織箱 馬印箱 馬印竿
 騎馬六十人 采馬十匹 兵粮雜具
 寛文六年丹後宮津城受取事件 五月四日關老連
 署ノ書面左ノ如シ

猶、左馬、水野、大亮、九鬼、長門、等、以、
 作付、少、下、以、其、意、以、上、

一筆、令、啓、上、

公方、稱、是、所、官、任、之、所、奉、下、以、公、易、以、將、又、
 兵、拒、丹、後、宮、使、此、書、以、通、言、其、不、命、之、付、
 彼、城、地、以、

召、上、以、依、之、為、
 上、段、爰、之、公、易、亦、大、張、亮、以、其、公、能、有、丹、
 後、宮、使、城、地、取、付、方、并、以、其、公、能、有、以、其、公、
 殿、既、以、

作、付、以、大、膳、亮、上、着、以、其、公、能、有、以、其、公、
 役、積、也、以、下、以、其、公、能、有、以、其、公、能、有、以、其、公、

ハ 忍 々 何 事

五月四日

相承内落正重知
土屋但馬守数直
久世出守守彦之
行 爲 多 衆 也 別

小出信濃守殿

右ノ書面ヲ當時ノ辞ニテ御奉書ト呼ブ言古紙ニ
書レ聞老ヨリ留守居ヲ呼出カシ之ヲ授ク右ノ四
名ハ老中ナリ此ノ書付トアルハ丹後守高圓が父
入道廣高ト不和ニシテ一藩兩黨政令紊乱シテ政
令ヲ出カス能カラズタルヲ列記ニタルモノ
ナルガ聞原無キヲ以テ略ス

出張同勢 手先筒(銃ノ一)百挺 持筒(中軍銃ノ義)三十

二挺 大筒(砲ノ一)二十二挺 長柄五十筋 持長

鎗(中軍槍ノ義)二十筋 持槍六筋 諸士七十三騎

衆掛十九匹 徒小姓五十人 後列 筒二十挺

士三十七人

延寶八年將軍嚴有院権前、香銀三枚ヲ供フ

文政十年丁亥正月老中松平周防守江戸ヨリ入京

シ面會ノ申込アリ由リテ上京ス其ノ行列左ノ如

シ

具足櫃 荷丁二人 弓 足輕之ヲ肩ニス 先手小頭 摺

箱一對 持手二人 徒士六人 徒士目付一人

指替筒二挺 並テ 薙刀一人之ヲ荷テ 旗頭 並テ人

町 被 志

近習 並二人 駕 座尺六人 駕殿 近習中小姓
各二人
 祐筆 同二人 手廻り 小頭 橋持一人 手代り 一人 立
 傘床 几草履取三人 並 テ 挾箱 一對 持手二人 蓑
 箱 茶辨當 持手 茶坊主 押 鹿 小頭 口
 附 二人 馬 沓籠 口附 二人 衆替馬 沓籠 桐
 油持 下駄持 供兩掛 三荷 荷籠 五荷 押 二
 人 醫者 駕夫 三人 長刀挾箱草履取 竹馬
 押 二人 納戸方衆掛 槍草履取 近習衆掛槍
 持草履取 同 同 用人 若黨 四人 駕下 四人
 槍挾箱草履取 口付 二人 馬 沓籠 荷籠 二荷
 押 槍 二筋 八對道具 トテ 小候 二 許サレ ス然
ルニ 列中槍持 二人 ア ル ハ 市橋田中 二家 格例

ヲ用ヒ 旅中 二 本道具 ヲ用ヒ ト ヲ云フ
 駕殿 徒士 ハ 白衣折腰 白衣ハ平服ノ下折腰ハ 其ノ他 帶刀
 人 半纏 股引 一文字 笠着用 小頭 足輕 長羽 織股
 引被 リ 笠着用 宿刺 役人 前日 出立 休所 宿所
 定ム 小出 信濃 守休 又ハ 泊ト 大書 セ ル 札ヲ 其
 ノ宿驛 本陣 ニ 掛ク
 八木驛 小休 龜山驛 晝餐 廣道 小休 峠
 小休 程原 名 京都藩邸 着 歸途 同
 合三日 惣入用 銀貳貫九百三十六及三分三厘
 獻上儀日 並ニ 拜領 品目
 元旦 登城ノ際 造太刀 一腰 馬代白銀 一枚
 獻上 御流盃 時服 二 銀 頂戴 栗一籠 四月中ニ獻上

丹波志

呈書 鯛一箱 四月歸邑ノ際ニ献上
 参観 翌年四月 造太刀一腰 馬代銀一枚 紗綾二卷 献上
 茅栗 四月献上 時服二領 五月五日 造太刀一腰 馬代
 一枚 八月朔日 時服二領 九月九日 朝倉山椒一箱 八月
 中ニ献上 栗一籠 十月中献上
 干鯉一箱 暑中献上 串海炭一箱 寒中献上
 將軍家ニ太子アレバ献上アリ 定品無シ 御臺
 所ニ縁故アル亦同シ
 暑中寒中ノ呈書 歸邑中ニハ老中ハ呈書ス在
 府中ニハ其ノ邸ニ伺候ス
 江戸邸 雉子橋外 京都 醒ヶ井通り 栢原下
 町

出仕 柳ノ間 由リテ柳ノ間大名ト呼ブ 小身大
 名ノ異稱ナリ
 行列六々ト呼ブ 前列徒士六人 奥列ノ士六人ヲ
 謂フ 其ノ他ハ皆僕隸ナリ

京都府立総合資料館所蔵



定紋



替紋



琴

押ノ半纏印

小麦山ノ麦ノ字ヲ取テ印シトス



惣金



惣金

天和三年三月天下饑レテリ(日本中ハ吉)先祖ノ者ニ於
テ権現様(東ノ照宮)ヨリ符領ノ品アラバ申シ出アベシ
トノ丁ニ付藩中ヨリ井上源兵衛先祖源吾拜領ノ
書面及ビ腰ノ物(大小刀劔)ヲ差シ出ス後ニ戻ドサレ
タリ
吉親入國ノ際ハ家臣ノ祿制多ク知行所ニテ與ハ
ラレシガ寛永初年ヨリ藏米渡シトナリ貴臣モ卑
隸ト共ニ食ヲ公廩ニ仰ケトナレリ當時五ツ物
成リニテ高百石ニテ實收五十石ナリシヲ世間ノ
祿制并トナリ四ツ物成リニ改メ百石ノ呼ヒ聲ニ
テ四十石ノ實收ニ改メラル吉親ノ父吉政ハ八萬
石ノ身代(前看)ナルヲ以テ吉親初ッ入部ノ際ノ祿

町
城
志

制ハ左ノ如ク高率ナリレト云フ

分知 三千石 吉親ノ外孫 小出十左衛門

同 二千石 同孫 小出百助

同 五百石 門關家老 小出孫兵衛

四百石 太田發之進

三百石 長瀬久左衛門

以下年寄三名 用人三名 御城使一名

何レモ二百石前後 物頭五名 郡奉行寺社奉

行兼役ニ名又ハ三名 何レモ二百石未滿百石

以上 中小姓長屋住居 百石未滿 給人徒

士十石五六人扶持種々 足輕二三石ニ三人扶

持

寛文五年徳川三代將軍家細令云々此ノ度東照宮
五十年法會モ行ハレ當代ニ至リ昇平既ニ久シキ
ヲ以テ自今諸家ノ證人ノサレ、テ許サレタリ
此ノ證人トハ諸大名及ビ其ノ家老等各親子第ヲ
以テ江戸ニ送り交代セシメテ賫トセシモノナレ
ハ此ノ時ニ至リテ悉ク之ヲ放還マラレタリ實ニ
恢弘ノ量卓絶ノ見ニ非レバ行ヒガタキ美政ナリ
思フニ是レ保科正之ノ建議ニ出デタルナルベシ
左ハ去リ乍ラ大名ノ本妻嫡子等ハ依然トシテ在
リ是レハ此ノ咨令ノ出デタリトテ妻子ヲ領地ニ
引キ取ルハ大名ニ於テ遠慮ナキニ非ズ家老ニ於
テハ之ニ由リ在國在府ニ付キ大ニ家族居住ノ自

町
城
志

由ヲ得タリ 貞享三年錢砲ノトアリ證據ヲ出ガ
 ス
 安政ニ卯年十月二日夜四ツ時今ノ時區江戸大地
 震火災 本即大崩レ 元治中大阪市中取締 十
 月京都由小路郡山藩跡固ノ 八月騷動後治中巡
 邏 慶應元年征長歩兵奉行トシテ先陣等相勤ム
 巡見使ノ事 幕政漸弛ニ告朔ノ餼羊トナル而已
 ナラズ時トシテハ一種ノ示威旅行トナリテ地方
 ノ怨嗟トナレルゾ情無キ幕府ハ是レ等ノ弊害ヲ
 視察スバク隱密十數名ヲ派シテ隱々密々裏ニ天
 下ノ事情ヲ將軍ノ机上ニ呈示スルノ機關ヤハ設
 ケアルニ其ノ隱密役人サハ有名無實トナリ巡檢

使ノ弊害カ將軍ノ耳原ニ觸レガリシトノ遺憾ヤ
 ヲ左ノ記事ヲ視ヨ恰幕府ノ名代使者カ臨見テモ
 スルカノ觀アリ

御遊見使御泊記録

五月九日深御泊

同十二日園部御泊

松平惣兵衛様

御紋 丸ニ七本冒扇

中根半七様

御紋 だき三ようが

山根傳十郎様

御紋 横とつおう

遊御出迎御見送り共 御町奉行御代官 御物

頭 御家老 大目付 何レモ本格式ニテ本供

引馬アリ

御行列次第 御一方ニ付

御臺所長持五指 各八人持 先拵一人 問屋羽織
 股引脚半二人 露拵同心二人 御具足櫃一差
 烏毛鑓一本 片拵箱ニツ 町役人二人 御本
 陣一人 先徳士三人 御象物 徳士四人 拵
 箱三荷 沓籠ニ荷 竹馬三荷 御辨當一
 荷
 五ツ時御出立
 一御自分駕七丁 一辻駕籠十二丁 一駄馬十
 六匹外ニ足 一人足二百二十人 一御辨當
 一御膳 御上木具 中通惣輪 下日光 上下九
 十七人 一御酒 金色どびんにて用也
 一火筒 馬乘一人 附五十人 一御本陣ニ盛沙

一木錢 御上三十五文 同下ノ者十七文 味噌
 一人一飯二十匁宛 一債銭出不申 一長持五棹
 一拵箱九荷 一沓籠六荷 一御辨當三荷
 一金五十六匁九分 壹分 十四匁二分二厘五毛
 二朱一匁一分一厘三毛 銭金五貫六百八十
 六文 歩一ノ四百二十三文
 一黒米七十五匁 上白米八十二匁 中白八十匁
 下白七十八匁
 右ノ記事ニ視ヨ一旗士ノ往還ニシテ數十百ノ人
 夫ヲ要シ三名分ヲ合算シテ幾數百人ヲ要スルカ
 ヲ之ヲ諸藩イ分メト云ヒ大名苦情中ノ一二居ル
 前文ノ祭令ニ視ヨ 寛文十年ノ書中ノ算用ハ之ヲ立

町
 岐
 志

相場ト唱ハ金壹兩ニ對スル銀相場五十六匁九
 分ナリ具ノ壹分ト書ケルモノハ金壹兩ヲ四分シ
 シルモノニテ此ノ銀モ亦五十六匁九分ノ四分一
 ナリニ朱トハ金壹兩ヲ八分シタルノ二分ニテ壹
 朱ヲ二個寄セタルナリ當時金壹兩以下ハ四分算
 ナレバナリ具ノ錢金五貫六百八十六文トハ金壹
 兩ノ錢數ヲ云ヘルナリ歩一ノ四百二十三文ト云
 ヘルハ金一步即チ壹分ハ錢一貫四百二十三文ニ
 當ルナリメハ貫ノ代用字ナリ金銀兩本位ノ當時
 勘定ノ煩シキヲ想ハ加フルニ錢相場札相場アル
 ニ於テオヤ 價錢米味噌等ノ價格ハ幕府勘定奉
 行ノ指定價表ニ係カル

分限明細帳

家老 五百石 長瀬久左衛門 四百石 太田金左衛門
 三百石 後五百五十石 小出内匠
 年寄 二百石 原九郎左衛門 二百石 里見権太夫
 二百石 小島十左衛門 百七十石 杉本助左衛門
 二百石 小島吉郎兵衛 百八十石 米嶋彌三左衛門
 側用人 百三十石 一色庄太夫 百五十石 南條十郎左衛門
 百三十石 宮川只右衛門 百石 三十石足高表用人兼帯 坪井忠左衛門
 二百石 仏生三右衛門 二百石 杉本友右衛門
 八十石 三人扶持若黨附 一色次郎左衛門
 旗奉行 百五十石 鈴木市左衛門
 物頭 百七十石 木瀬數馬 二百石 稻本八右衛門

町 城 誌

百五十石 殿部太左衛門 百石 三十石足高取用人兼帶 木村三右衛門

七十石 三十石足高書翰方兼 白木武左衛門 百五十石 則武十郎兵衛

百石 木瀨太郎兵衛 百五十石 兼役 小島五郎左衛門 七十石

三人扶持 御前附 寺井又右衛門

長柄奉行 兼役 百五十石 小島五郎左衛門

近習番頭 兼役 無高 殿部太左衛門 兼役 木村三左衛門

同 今井藤七

元締 兼役 無高 則武十郎兵衛 金拾兩三人扶持 御奉行兼 杉山郡兵衛

百石 足助政右衛門 五十石三人扶持 上原文助 十五石三人

扶持 飯田吉右衛門

徒士頭 二百五十石 永井六郎左衛門 金拾兩四人扶持 里見

左内 無高 木村太郎左衛門

郡奉行 五十石三人扶持 並河儀左衛門 百石 姓河

又兵衛 百五十石 岡田文藏 無給 浅井忠藏

勘定奉行 五十石三人扶持 庄林金吾 同 藤田武太夫

大目付 無給 鈴木市左衛門 同 惣頭兼 白木武右衛門

同 木瀨太郎左衛門 同 飯田吉左衛門 同 高橋藤

左衛門 同 稻本茂左衛門

町奉行 百三十石 小林久兵衛 京都留守居 五十石三人

扶持 山内孫右衛門

馬廻り 二百石 川勝三郎兵衛 百三十石 宇野源左衛門

百三十石 庄林良助 百三十石 猪子多門 百石 木崎茂助

百石 黒川右門 百石 殿部三次郎 八十石 小林嘉内

八十石 善清奉行 荒木嘉藤次 八十石 免堀 間嶋丹次 七十石

甲田次郎右衛門 七十石 黒田勇藏 五十石三人扶持
 千種源吾 日原田郡次 同 沼喜左衛門 五十石鈴木
 市郎右衛門
 近習 百石 待田助助 拾四人扶持 若殿階 原孫次郎
 百三十石 平井善兵衛 百石 供頭 渡邊兵次 百石 林
 小藤太 七十石 人見伴七 五十石三人扶持 淡水植右
 衛門 十八石四人扶持 林勇助 十八石五人扶持 人見平
 藏 十三石三人扶持 高橋藤左衛門 十五石三人扶持 今
 井藤七 八石三人扶持 小島辨藏 十石三人扶持 小林徹左
 衛門 十石三人扶持 高屋典助 五十石三人扶持 並河安
 次郎
 部屋 百三十石 徳田長四郎 百石 渡邊甚助 十四四人

扶持 白木五八 五十石三人扶持 和田左源太 十石三人
 扶持 供頭 里見藤吉
 次諾 五十石三人扶持 長瀬新八 二百石 表用人 和田平九
 衛門 百八十石 流 鍊 百五十石 寺尾藤兵衛 百三
 十石 並河庄左衛門 十四四人扶持 坪井七郎 百三十石 西富
 右衛門 百石 小林六左衛門 百石 長瀬小左衛門 百石
 並河兵八 百石 松本長左衛門 百石 竹下幸八 十石
 四人扶持 鈴木善八 七十石三人扶持 川勝兵太夫 五十石三人
 扶持 服部小左衛門 五十石三人扶持 稻本茂右衛門
 五十石三人扶持 戸谷平次郎 五十石三人扶持 中山覺兵
 衛 十六石三人扶持 山本左助 十六石三人扶持 永野餃
 右衛門 十三石三人扶持 田中安兵衛 十五石三人扶持 山

田忠次郎 十五石三人扶持 並河郡右衛門 十五石三人扶持 高橋惣助 十三石三人扶持 篠原清右衛門 十人扶持 木村庄藏

警師 百七十石 中村玄理 七十石 粟種料銀五枚 版訃隆齋 三十人扶持 粟種料銀一枚 佐久間玄道 二十人扶持 木口昌叔 七人扶持 金貳枚 粟種料銀三枚 縣 長積 十七人扶持 山崎

玄齋 五人扶持 田升勉菴 五人扶持 村瀨正元 五人扶持 近藤素菴

給人格中小姓 全十四人扶持 木瀨八郎 四木村金藏 日小昌十内 日左林要八 八十石 山内藤太夫

十人扶持 長瀬猪右衛門 百石 浅井忠藏 八十石 今井十兵衛 十三石三人扶持 五十嵐惣左衛門 五十石三人扶持

持速見軍藏 十五石四人扶持 衣川源四郎 無給人見源八

代官 十石 高田文平 十石 宇野紋右衛門 十石 谷吉左衛門 十石 服部九右衛門

中小姓 十三石三人扶持 藏奉行兼 小川次左衛門 十石三人扶持 宇野新吾 十五石三人扶持 西村彌三郎 十石三人扶持 藏奉行 井口久太夫 十石三人扶持 中川兵右衛門

中小姓并 十石三人扶持 小林仲五郎 十石三人扶持 舟越慶右衛門 十二石三人扶持 吟味役 湯浅武右衛門 十石

三人扶持 澤田甚右衛門 十石三人扶持 下屋敷留守 河合惣右衛門 日藤田傳右衛門 日安積八之丞 日武良方

内藤仁右衛門 日作事奉行 服部理兵衛 十四人扶持

左谷平五郎 十石三人扶持 右筆 三增嘉兵衛 十四人
 扶持 木崎藤馬 十石三人扶持 原彌平 曰武具方 谷山
 孫四郎 曰銀札場目村 大野甚八 曰寺所佐五右衛
 門 曰右筆 市原条助 曰舟越九助 無結吟味役新抱
 中山大右衛門 曰木下三郎右衛門 曰人羅喜
 太夫 七石 左膳殿附加納怒八
 徒士目付 十石 三人扶持 山内平助 曰宇野藤藏 曰吟
 味役 竹村興市 七石二人扶持 旅籠方 山下清藏
 茶道 八石二人扶持 柘本喜齋 六石二人扶持 柘本專賀
 曰山内仙朴 曰山内德齋 曰澤田春雨 曰山
 内友嘉
 小僧 六石三人扶持 衆原幸右衛門 五石二人扶持 小林

文次郎

徒士格役人 八石二人扶持 山奉行 岡村又七 七石二人扶持
 同役 谷村右平次 同京置場取計 杉本甚太夫 同銀札場目付
 坂本七右衛門 同京置場取計 神田太助 曰諸色渡方
 八木渡平 曰銀札場目付 寺井嘉六 曰吟味役 関徳
 八 曰勤定 大西藤助 曰吟味役 梅本市兵衛 四石二
 人扶持 即定 舟越小三郎
 徒士 七石二人扶持 遠藤源太夫 曰藤村源右衛門
 曰山下七兵衛 曰鈴木善司 曰木崎太一 曰服
 部惣藏 曰大町岩七 曰西村彌三郎 曰田中
 岩右衛門 曰小濱儀助 曰料理役 中山傳三丞
 曰山田藤五 曰谷村孝八 曰新井茂十郎 曰藤

町 城 志

田大助 曰右筆見習 石井庄兵衛 曰加納銀藏 曰
都築助右衛門 曰中根勇助 曰竹村錄次郎
曰足立孝右衛門 曰内藤和太 曰松本平太
曰横田林八 曰平岡隅右衛門 曰岡 多太八
曰浅井貴間八
隱居 十人扶持 猪子一空 曰永井正入 三人扶持 並
河惣清 二人扶持 服部臨翁 曰待田惣休 曰縣
壽仙 曰羽野道壽 一人扶持 谷 道昌
御次物書 五石二人扶持 多間五郎助 曰山内彦
次郎 曰森井新造 曰舟越興三兵衛 曰岡野
牧右衛門
賄 五石二人扶持 六人 料理人 曰四人 膳家具役

曰三人
坊主 五石二人扶持 六人 三石一人扶持 一人 六石三人
扶持 武具下役 二人
下臺所賄 四石五斗二人扶持 四人 廣敷賄 五石
二人扶持 一人
在所留守居 五石二人扶持 二人 残り物方 六石五斗
二人扶持 一人 着到方 六石五斗
二人扶持 三人
組頭 六石五斗二人扶持 九人 内一人中頭 内一人小頭 内一人 五石二人扶持
長 中 小 頭 頭 頭 五人
武具方下役 七石二人扶持 二人 五石五斗二人扶持 三人
五石二人扶持 一人 内 具足師 細工師 一人

町
城
志

山方下役 五石二人扶持一人 四石五斗二人扶持二人
 郡方下役 四石五斗二人扶持一人 銀札場足輕目付
 四石五斗二人扶持二人
 京置場足輕目付 四石五斗二人扶持二人 持弓組
 持筒組 先弓組 明子組
 錠前番 下坐見 手大工 板屋根方 數寄屋
 預り庭方 御部屋使番 瓦屋根方 板屋根方
 館門番 中番 北門番 南門番 木崎口門
 番 小山口門番 納戸藏番 池淵番 町同心
 代官手代 以下小者畧ス
 以上
 二十石 徳雲寺 五石 東光菴 五石

教傳寺 壹石 藥林寺

以上

維新ノ際即慶應四年正月三日無事ニ過ク 昨
 年末 將軍家ハ政權ヲ返上シテ政令ハ大政官ヨ
 リ出ブルトナリタル旨在京諸役人ヨリノ報告
 ニテ知レ當地人氣モ宜敷ク上下舉フテ新年ヲ祝
 レ居タルニ東方動搖スルトノ風聞アリ曰ハク官
 軍龜山城ヲ攻ムト曰ハク薩長土ノ軍ヲ以テ丹波
 ノ佐幕藩ヲ屠ル即時人ヲ放ワテ八木ニ屯セシメ
 以テ探問スルニ官軍山路ヲ取り馬路村ニ宿陣シ
 龜山藩ト應對中ニアリ談藩モ多分降伏スルナラ
 ン次ハ當藩ニ及ブナラント便十家先一名馬路ニ

叫 坡 誌

出張シ禮ヲ辱フシ辞ヲ昇フシテ降伏ノ實ヲ表ス
七日敕使着園當藩ハ領地ハ木村ヨリ此ノ所ニ至
ル迄出迎案内ニ手ヲ盡シ品ヲ盡クシ以テ其ノ意
ヲ迎ヘタリ八日ニ至リ官軍ハ奥ノ方ニ進發アル
ベシト取沙汰スル折柄一騎篠山地方ヨリ驅ケ付
ケタルアリテ俄ニ人氣立テ驛ヲ令ニモ合戦ニテ
モ有ルベク見エシハ若州小濱藩主ガ幕府方トシ
テ大坂ニアリシニ幕軍敗績シタルヨリ摂津ヨリ
山越ニ歸國スルヲ撃ツントスルナリト知レ左レ
ハ此所等界限ニテハ戦ノ起ルヲモナカルベシト
テ町民ノ人氣ハ差々安堵シタルモ藩士ハ何時
徴發セラレハヤモ計ラレズト安キ心モナカリシ

ガ九日ニ至リ官軍出發シテ篠山ニ向フ此ノ時官
軍ノ募ニ應ニ藩領ノ舊家連ガ續々軍裝ニテ出懸
クルアリ従前領主ノ命ナラハレハ佩刀旅行ナド
爲スナキ輩モ弓箭組ノ名ノ下ニ隊ヲ爲シ列ヲ爲
シテ前後ニ押出シ領主ノ威令領ニ行ハレズナレ
リ斯クテ維新トナリ藩主小出伊勢守ハ改メテ國
訃藩知事トナリ君臣復々君臣ナラズ舊藩臣太田
發三進長瀬久左衛門小島辨左衛門藤田克之助ハ
奏任官トナリ小出孫兵衛以下十七名判任官トナ
リ大屬ニ任セラレタルモノハ見俊馬以下二十八
名權大屬トナリタルモノハ淺井市郎以下八十三
名少屬トナリタルモノハ田中岩次以下四十五名權

京都府立総合資料館所蔵

少屬トナリタルモ、林檎之進以下三十五名而シ
テ此ノ内ヨリ實務ニ慣レタルモノ出デ、事ヲ執
リ知事ヲ助ケ行政ノ任ニ當リ太政官命令新政ノ
外ハ舊慣ニテ政事ヲ布ケリ

明治三年進士貢舉ノ令アリ大著三人中著二人小
藩一人之ヲ東京南校ニ入ル 當藩ヨリハ一人東
上ニテ南校ニ入ル當時ノ大學ナリ

幕府ニ於テ新藩ト國主大名ハ別トシテ其ノ以下
ニ於ケル大名ナル城主ト陣屋大名即チ小名ナル
藩權ノ差ハ非常ナルヲ以テ城主又ハ城主格トナ
ルヲ望ムモノ鮮カラズ之ニ伴フ出資ニ考ヘテ敢
セザルノニ當藩モ亦其ノ一ニ居テ種々運動シタ

ル結果遂ニ昇格ノ榮譽ヲ得テ俄ニ城門ヲ築ク天
守閣ヲ起サセトシ先以望樓ヲ作ルナド藩士モ役
セラレ農氏モ謀セラレ木石ヲ山中ヨリ採リ來リ
美觀ヲ街ニ移客ニ誇ル最中ニ維新トナリ世態變
遷ノ際ニ猶モ工事ヲ繼續スルニ及シ異聞東方ヨ
リ飛來ス曰ハク膳所藩ハ城郭ヲ賣ルト此ノ一語
ハ藩主藩臣ヲ驚愕セシメ發止論ト新築説トノ舌
戰トナリ有耶無耶ノ内ニ年所ヲ經テ遂ニ園部ノ
一長物トナリ了シヌ
藩札ハ享保年間ヨリ増發ノ度年ト共ニ加ハリ初
發當時幕府ハ對スル保證準備ナドハ名ノミニテ
不換紙幣ノ跋扈ハ頗テ金銀銅貨ヲ根柢ヨリ排除

京都府立総合資料館所蔵

維新當時大及ニ
於テ國作シタルヲ
新幣紙幣改テ舊
札ニ交換シテ廢
多量ニ爲作舊
札ヲ發見シテ
今日ヨリ現ニ舊
札ノ粗糲ナリト
舊ノ札ハ

レ見ノ迹ダニ見ル可ラザルニ至レリ明治四年七
月調査ニヨレバ其ノ流通高四萬四千二百七十一
圓六十四錢八厘ヲ計トス是レ連モ硬貨トノ對價
ニアラズシテ本政官發行ノ新金札ノ價格ナリ寬
政年間藩ノ財政上一時ノ救濟方途カ此ノ如キ弊
害ヲ後世ニ遺ミタルナリ左ハ左リナガラ紙幣斃
レト云ハル言葉ハ三百六十大名皆爾ルナリ
二百八里 園部ノ二百八里ト言フ丁アリ小出家
領地ノ數ヲ言ハルナリ
諸語トシテ士大夫間ニ傳フル所ノモノ有リ曰ハ
ク豊臣氏ニシテ天下ノ主トラシニハ吾ガ小出家
ハ百萬石大名ナリト前示小出家ハ史參觀

他流仕合 武者修行トテ諸藩ノ刀術家ガ腕試藝
較マニ巡國スルヲ往キコレアリ幕臣ハ出ブル
大抵ノ藩ハ談藩自藩ニアル流派ナレハ門衛ノ者
コレヲ容レ藩中ニ無キ流派ナラシニハ他流仕合
ハ御断リトノ一言ニテ門前掛ヒテ喰ハスガ此ノ
藩ニ於テハ門戶開放主義ニテ何流何派ヲ問ハズ
之ヲ款待スルモノカラ小藩ナカラ武士道ノ名譽
ヲ博セリ
近眼ニ士ノ仕合 萬延元治ノ際天下ニ事アラシ
トシテ武術大ニ行ハレ幕府ハ講武所ヲ江戸ニ設
ケ大ニ新術ヲ精勵レ諸藩又各自相競フテ新技ヲ
鍊習ス幕臣中江戸ニアリテハ今堀豊太郎京都ニ

叫 岐 誌

アリテハ著者ノ同僚ナル佐和文十郎東西ニ雄タ
リ一日當藩邸範役武部左衛門来リ技ヲ闘ハス是
ハ珍ラシ近眼同士の試合見ントテ佐和ノ同僚又
ハ門人下僚等片唾ヲ吞ミ汗ヲ握リテ見ル雙方立
派ナル體格ニテ拵合ニ甲打乙受西合東離何時果
ツバウモ見エズシテ相分レトリテ終ル著者問フ
一又先キノ見エ兼ヌル眼カニテ相争ノ竹刀か如
何ニシテ見エ得ル乎曰ハク壯時ヨリノ鍊磨ニテ
假面ヲ被レバ四五尺ハ見エ得ト武部ハ文學ニサ
ハ志アリ國部ヨリ著者ノ寓居ナル龜岡ハ書ヲ携
ハテ来往ス年六十四歳四里ヲ歩レテ往還ス而モ
記憶ニ富ム 死ニスル年八十四明治四十三年六

月十二日

園部公園 三十五年町内協議シテ之ヲ郡中有志者ニ謀リ合意上其ノ筋ノ許可ヲ乞フテ郡有トナシタルモ日露戰役ノ起ルヲ以テ期ヲ延キ三十九年二月ニ至リテ起工ニ府技師武田某主任トナリ經費六千圓全ヲ捐ラ、着年シ完成セリ寄附金千圓アリ

忠魂碑 花崗石高二丈五石幅三尺大山元帥ノ書ニテ建設費二千圓

新ノ池中央ニアリケル式ノ橋ヲ架シ池中ニ遊舫ヲ放セリ

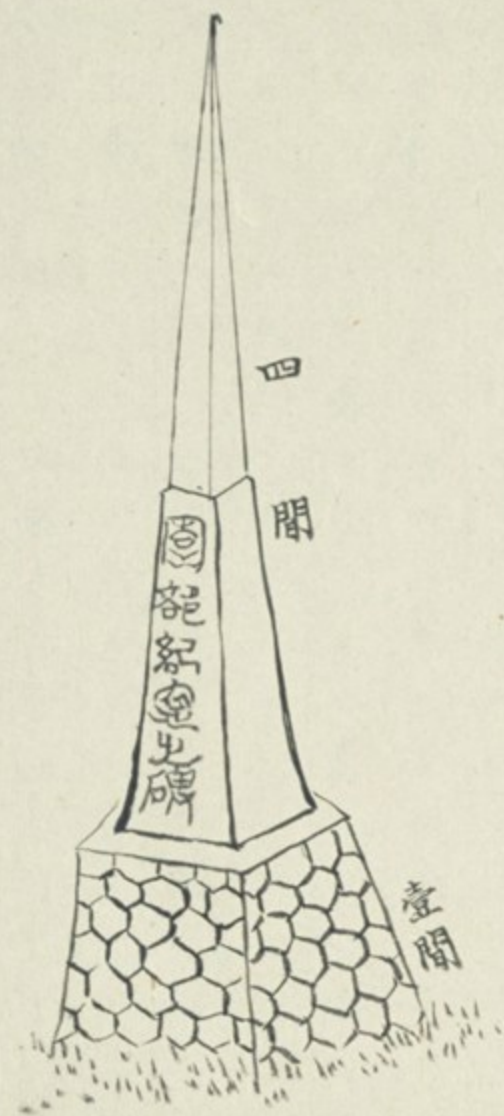
千草亭アリ集會スバク遊賞スベシ

公園廣袤二十餘坪維新以後コレヲ顧ミルモノ無

草苑々トシテ踏ミ入ルベキ迹サハ無ク予ガ武
 部源造ノ故塔ヲ訪ヒシ時ニハ武部兵太郎氏先導
 セシニ草芥中ニ之ヲ見タリ今ハ之ヲ手入シテ輒
 ク知ルヲ得バカラシム
 鳥見堤 武田曲 見遣ノ丘 忠魂壇 常盤森
 時雨坂 紅葉谷 行合坂 御杉林 鞠池 真弓
 橋 轟橋 尊池 朝明森 聴鶴亭 小出森 蘭
 嶋 霞垣 之ヲ國中ノ十八銘所トス
 紀念碑 明治二十七年七月建設 舊藩士原保太
 郎ノ文筆ニ係カル原ハ此ノ藩士ニシテ著者ト師
 ヲ同フニ共ニ京儒岩垣月洲先生ニ學ブ維新ノ際
 出テ、政治方面ニ從事シ官階ヲ經歷シテ所々ノ

地方長官トナリ遂ニ北海道長ニ擬セラレテ退ク
 碑ハ城内古城トモ呼ブ地ニテ藩校ノ址ニアリ士族領民ノ
 藤金ニテ成レル所トス
 元和五年丹波國園部藩祖從五位下伊勢守小出吉
 親從但馬出石移封馬關荒施敷藩治ニ百五十餘年
 恩遍封内明治維新藩廢士民追慕不已於是建石干
 舊城址紀之以垂采昆云
 京都府知事從三位勲三等 北垣國道撰并書

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

岡田種右衛門

延寶八年徳川家綱將軍薨去セラレ嗣子無キヲ以
 テ綱吉迎ヘラレテ館林ヨリ入り職ヲ継グ其ノ寵
 臣柳澤吉保從ヒテ幕府ニ入り寵幸類無ク累リニ
 進ムノ勢ハ殿中ニ轟キ渡リ且ツ遠カラズ大名ニ
 取立テラレルニ至レバ夫々ノ用意セザル可ラズ
 トテ俄ニ家臣ヲ抱ヘントシ從フテ諸般ノ器具ヲ
 要シ又家寶トスベキ品ヲ需メザル可ラザレバ其
 ノ倭奸奸智ハ種々ノ謀畧ヲ設ケ商家ニ就キテハ
 類ニ強奪シ猶恠ラズシテ之ヲ諸大名ノ間ニ求メ
 ントセリ時ニ園部藩主小出家ノ重寶ニ文南ノ茶
 入ト云ヘルアリ日本希代ノ名器タルコト當時ニ

噴々々リシカバ吉保之ヲ聞キ知リテ一日殿中ニ
於テ小出伊勢守英利ニ向ヒ之ヲ見ントテ求ム英
利ノノ意ヲ推知シ固辞再三スルモ尚請フテ已マ
ザリシニヨリ英利乃思ヘテ今モシ断然之ヲ謝
絶セバ此ノ狡奴如何ナル蓋計ヲ廻ラシ如何ナル
珍事ヲ惹起サレカ知ル可ラ不徐ニ其計ヲ爲スニ
如カズト領ラ之ヲ見セ申サント約シテ歸リ藩臣
岡田彌右衛門ヲ召シ之ヲ謀ル彌右衛門ハ江戸留
守居役ニシテ用掛リタリ性豪毅ニシテ善ク断不
ル者ナリ即時謹シテ對ヘ云フ此ノ寶物持參ノ役
ハ私ニ仰セ付ケラレ度シ首尾能ク事ヲ計ラハン
ト藩主之ヲ許シ士人一同之ニ不同意ナルモノ無

レ明日彌右衛門寶品ヲ携ヘテ柳澤家ニ至リ旨ヲ
通ズ侍者見レテ受取ラントテ望ム彌右衛門曰ハ
ク拙者が主人ニ受ケタル命令ハ唯主公ニ謁シテ
之ヲ進覽セヨト云フニ過キ不貴殿幕ニ手渡シセ
ヨトハ鬼ノ毛ホドモ承ラ不是非トモ主公ノ拜謁
ヲ乞フトテ取次ノモノガ如何ニ云フモ如何ニ論
スモ抗辯縦横固ク取リテ遂ニ聽カ不侍者之ヲ告
保ニ申ス吉保已ムヲ得ズシテ延見シ且ツ其蓋ヲ
自ラ手ニ取ラテ見シトテ求ム彌右衛門聽カ不徐
ニ蓋ヲ筐中ヨリ取出シ左手ニ之ヲ捧ケテ曰ハク
主人ノ命ハ唯閣下ノ御覽ニ入レヨトコソ申シタ
レ御手渡シ仕レトハ斷モ承ハラ不君ソレヨリ御

覽セヨト右手ハ既ニ差添ノ上ニテ屹度身構ハシ
 リル者様ハ天下ノ大名ヲシテ震慄セシムル權臣
 ラ眼中ニ置カザルモノ、如シ吉保如何ントモス
 ル能ハズ苦笑シテ其事止ム藩主嘉賞シテ祿百石
 ラ加フ彌右衛門天和二年七月十五日没ス年六十
 六其ノ彌右衛門ノ子ヲ盛之ト云フ亦彌右衛門ト
 稱セリ父ノ賦性ヲ稟ケ剛直ナリ寶永元年淺草
 橋坂樓普請アリ時ノ藩主小出英貞其ノ工事ヲ命
 ゼラレシガ盛之具ノ奉行トナリテ竣工ス藩主内
 見分セシトシテ供觸アリ時ニ盛之他用ニテ使者
 ニ出デントシ主君ニ伺ヒ云フ様彌右衛門カ御使
 ノ役相勤メ歸邸スル迄御出アルマヅト固ク留メ
 ラ行キメ藩主已ムヲ得ズシテ之ヲ待テ其ノ歸ル
 十之ヲ大書院ニ石ス或ル人之ニ告ゲテ云フ主公
 頗ル不平ナルモノ、如シ宜シク用意周到ナルベ
 シト盛之喜モ憚ラズ次ノ間ニ眼指ヲ置キ憶スル
 色ナク間近ク進ニ御用ノ趣如何ニカ候フト云ヒ
 ツ、頭ヲ上ゲ屹度身ヲ正ス藩主色ヲ興シテ曰ハ
 ク今日普請見分ヲ差留メタルハ如何ナル心ニカ
 ヲレル詳ニ申シ述ベヨト言語鋭ク詰問アリ盛之
 少シモ忝ル、色無クシテ曰ハク然ル事ニテ候フ
 此度ハ尤モ御念入レサセラレタル御普請ニ候ハ
 バ過失アルベキニハ候ハネドモ公儀ヨリ御見分
 ノ節萬一ニモ不十分ノ御咎アリタラシ時ニ君既

丹波志

二御見分ノ下相知レ候ハ、如何ニ申譯遊ハサル
バキヤ此ノ御普請ハ全ク彌右衛門ニ任テ置ケリ
ト有リタランニハ其ノ敬腹ヲ仕ルベキノミニテ
候フベシ君ノ御見分ハ甚然ル可ラザル事故御留
メ申上ケタルニテ候フト辨告溜々水ノ流ル、如
ク演ベケレハ藩主納然色ヲ改メテ曰ハク危ウカ
リキ、
臨ムノ愚ヲ知ラザリシナリ予ハ尤モ忠直汝ノ如
キアルヲ喜フト直ニ佩刀及ビ時服ヲ賜ヒ且ツ祿
五十石ヲ加増シテ之ヲ賞セリ盛之ハ寶永二年九
月二十九日没ス年六十八
小出候深ク白隱禪師ノ道風ヲ欽レ屢々使ヲ遣

シテ藩師ニ請ヌ白隱便ヲ得テ訪ハント約ス寶曆
己卯ノ冬十一月白隱タマ、江戶ニテ約ヲ履
シテ候ノ師ニ至ル時ニ候外ニアリ因テ書院ニ入
リ待ツ候ノ臣屏風ヲ出シテ書ヲ乞フ白隱筆ヲ執
リ題シテ曰ハク

小出こいで、こい、り、あ、り、て、ま、い、ふ、る、名、を、一、松、を、風、う、く

候歸リテ大ニヨロコビニ珍襲シテ家ニ傳フ
劉石秋名ハ彙字ハ君鳳通稱三吉豊後日出ノ人釀
酒家ノ子ナリ幼ヨリ廣瀬淡窓ノ門ニ學ヒ朱子學
ノ蓋奥ヲ窮メ詩ヲ善クス京ニ入り惟テ垂レ子第
ニ授ク元治元年學習院ニ召サル院ハ公卿ノ學校
ナリ慶應二年園部藩文學ニ聘セラレ明治二年五

月廿九日没年七十四

石秋ノ京都ニアルヤ國部侯延キテ具ノ講書ヲ聞
キ遂ニ聘シテ藩校ノ教授ニ任ズ經義ヲ語り詩文
ヲ話シテ藩士ヲ教導ス政治ヲ議シ時政ヲ論セズ
故ヲ以テ赫赫ノ跡無シ死後具ノ子冷客緒業ヲ継
ギ近江ノ西大路藩ニ併セ教授ス行程ニ十里ヲ往
来ス能ク務メタリ壯年ニシテ没ス子アリ著者ノ
塾ニ入ラントシテ病ニ果サズ家道卒ニ衰フ

維新前後藩情一斑

萬延元年越前藩主松平慶永幕府ノ送載トナリテ
改革新令ヲ發シ幕府始祖ノ定メタル諸藩統御ノ
最大政策タル參觀交代ノ制ヲ弛メ諸大名ノ妻子

ヲ江戸邸ニ置クノ法ヲ格メタルヨリ幕府ノ權利
俄ニ地ニ墜テ譜代大名スラ東向スルモノ少ナル
ニ至リ殊ニ當藩ノ如キ外様大名タルモノニシテ
豊臣氏ノ舊誼ヲ憶フモノ此ノ機ヲ外サズトテ速
ニ入質タルノ妻子ヲ國元ニ引取り江戸邸ハ留守
居役一名ニ若干ノ江戸詰士卒ヲ置クノミトハナ
レリ此ノ時ニアタリ政令漸次慶更ニ朝政幕令往
々ニ途ニ出デ幕府ノ外國和親說ハ朝紳ノ爲ニ屢
破壊セラレ政黨ニ派トナリ東派ノ根據ハ京都ニ
アリテ關國ヲ主トシ一橋中納言松平肥後守コレ
ガ首魁トナリ西派ハ攘夷ヲ主トシ薩長土三藩コ
レガ主張ヲ爲ス而シテ其ノ實ハ會長ノ疾視トナ

ル會津藩主松平肥後守ヒシテ京都ノ守護職トナ
リ佐幕黨ノ第一位ヲ獨占シ威ヲ京畿ニ振フモノ
ニテ當藩モ勢ヲ命令ニ服セザルヲ得ザルナリ
初ノ幕府カ參觀交代ヲ格ノ諸侯ノ妻子ヲ團邑ニ
還ラシムルヤ其ノ趣旨諸藩ヲレテ實カテ養ハシ
メ一朝國家有事ノ際ニ之ヲ利用ヒシメント期セ
シニ風雲漸急變シ警聞四ニ跋セ當藩ノ如キモ亦
外ハ大段警衛ノ命ヲ受ケテ出兵シ内ハ領邑ヲ鎮
撫スルニ兵備ナカル可ラ不當路者ハ日ニ首ヲ擡
メ睦ヲ接シテ密議ヲ疑ラシタリ當時諸藩ノ京都
ニ師策ヲ有スルモノハ留守居役ヲ置キ諸般ノ公
務ヲ掌リシガ多クハ舊慣古格ヲ墨守スル輩ノミ
ニテ實務ニ適セザルヲ以テ諸藩ヨリ人撰シテ更
ニ其ノ任ニ當ラシメ之ヲ周旋方ト呼ビタリ當藩
ハ早ク京都ヨリ學者劉石秋ヲ聘シ文學ヲ獎勵セ
シガ多クハ漢工ノ歴史誣書ヲ講習スルカ詩文ヲ
弄スルニ止マリ活用ノ學ヲ成スモノ無キヨリ志
ヲ立ツルモノハ京都ニ出デ大家ノ塾ニ入ルヲ捷
運トナセリ藩士原保太郎ノ如キ亦其ノ一人ニテ
維新前夙ニ一高骨ヲ具ヘ京儒岩垣月洲先生ノ塾
ニ入り著者ト同窓タリキ維新ノ風雲ニ際會シ藩
閥ナキ身モテ次第ニ累進シ北海道廳長官ニ擬セ
ラル、迄ニ至レリ藩論ヲ一定シタルハ君侯ナラ
ズ老職ナラズシテ是等青年ノ指導ニテアリシナ

リ是ニ於テカ在國ノ君臣ハ周旋方ノ報告ヲ違テ
大藩ノ鼻息ヲ仰ギ以テ漸ク事ヲ決セシナリ殊ニ
當時ノ藩主ハ所謂大名育テノ若殿風ニアリシカ
バ常ニ病氣ヲ申シ立テ大抵ノ丁ハ家老ヲ以テ事
ニ當ラシメタルト云ヒハ藩ト云ヒ人後ニ落ツル
丁ノ多カリシハ遺憾ナリキ

多岐川

為自既統以高祖業
下道忠私孫文之成
審林非百入之於統
治別之之統忠之文
お名好之之統至公
伊知者有之之統有
心如之之統地十列
多之之統高祖生之
高之之統之統

忠之統

高之統

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

京都府立総合資料館所蔵

為白紙紙後紙等

為今方と紙札紙等

米肥借之紙札紙

多紙等之紙札紙

と紙札紙等之紙札紙

紙札紙等之紙札紙

紙札紙等之紙札紙

小書

山ノ下



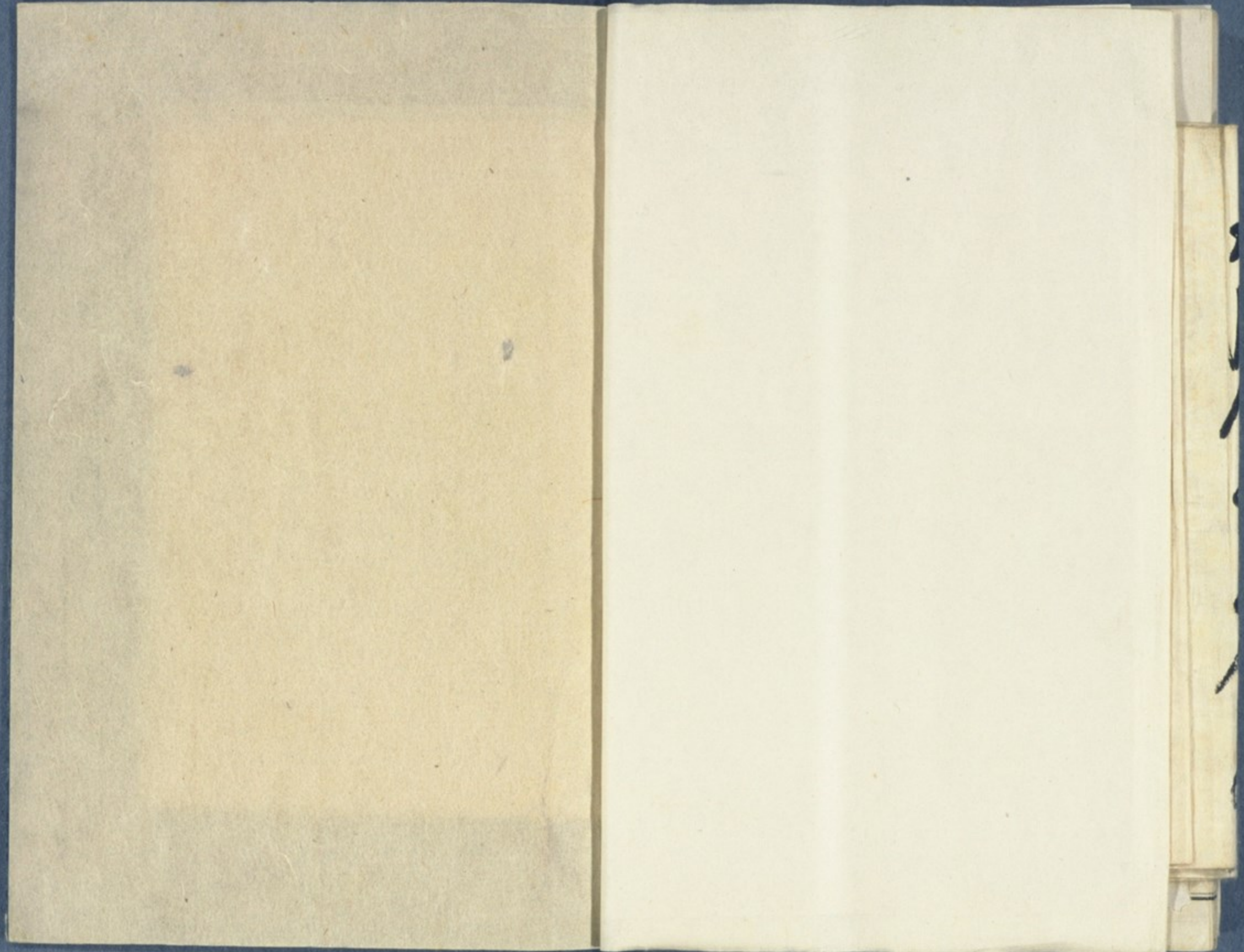
お国お友

お友
お友
お友

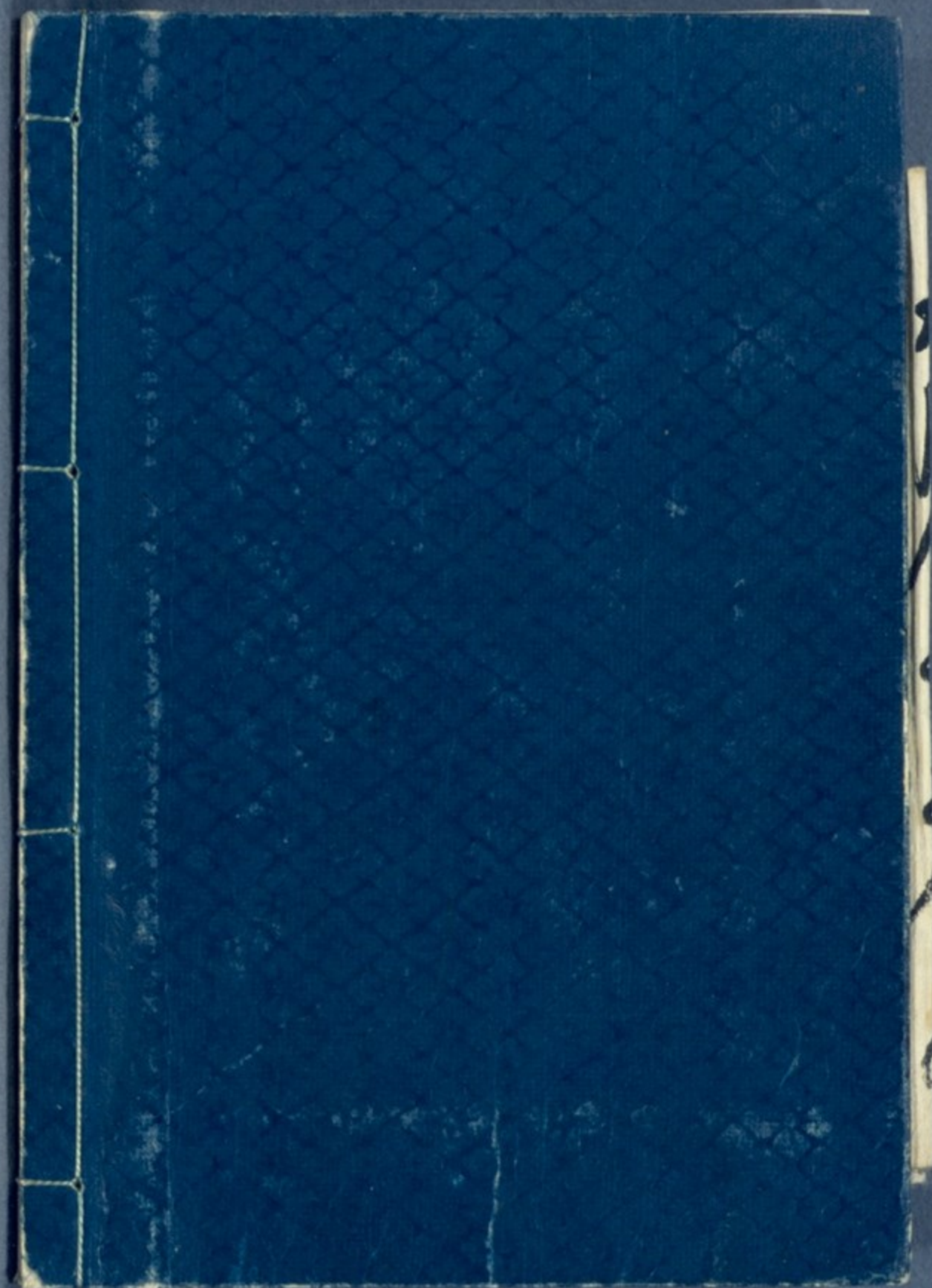
Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style on aged paper, consisting of approximately 15 vertical columns of characters.



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵